

東京市域拡張期における南葛飾郡町村の状況

神 立 春 樹

目 次

はじめに

- 1 葛飾郡町村の位置，地勢
- 2 土地
- 3 交通
- 4 生産額物産構成
- 5 会社・工場
- 6 人口
- 7 保健衛生，上下水道
- 8 教育，文化施設
- 9 各町村現況の記述
- 10 南葛飾郡町村の諸類型

はじめに

(1) 本稿の内容

東京市は、1932（昭和7）年10月1日、隣接5郡82町村を市域に合併し、従来の15区から35区、85平方キロメートルから555.99平方キロメートルの“大東京市”となった。隣接5郡とは、荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡、南足立郡、南葛飾郡である。この市区編入に際して、町村ごとの「昭和七年一月市域拡張調査資料」の「現状調査書」が東京市臨時市域拡張部によって作成された。本稿はこの「現状調査」書の南葛飾郡20町村分により、南葛飾郡の地域的状況を考察する、私の東京東郊地域史研究の一つである。

(2) 「現状調査書」について

ここで依拠するこの現状調査書は、南葛飾郡の町村分を小松川町についてみると、表紙は「昭和七年一月市域拡張調査資料 南葛飾郡小松川町

現状調査 ① 東京市臨時市域拡張部」で、内容は、小松川町略図、南葛飾郡小松川町々勢要覧、の後に目次がある。以下、概要、人口、財政、教育、行政、保健衛生、社会事業施設、上水道施設、下水道施設、交通及通信、産業、社寺宗教、各種団体及組合、警備、で、謄写印刷冊子38ページである。この小松川町以外の19町村分も内容は同じで、表紙に①から⑳の各番号が付されている⁽¹⁾。

近代日本の地域研究の基本資料は府県統計書であるが、それは郡市単位を基本とし、町村単位は土地、人口などのいくつかの項目についてのみであり、町村ごとの状況の記載は少ない。本文献は、東京市の市域拡張、周辺郡の市区編入ということにおいて作成されたものであるが、個別町村ごとの貴重なものである。

本文献は1932（昭和7）年時点でのものであるが、戦前期の到達点という時期についての検討ということになる。

形成されたものであり、それは東京の近代都市としての展開にともなうものであろう。日本における裏日本の形成が、日本近代・資本主義経済社会の成立過程においてであるように、東京の西郊・東郊の対比に含意される地域的差異もまた、資本主義の展開、東京の首都としての発展、商工業地化・都市膨張化過程で形成されたであろう。このことの検証はまさしく日本近代社会経済史の一つの、そして重要な課題であるといえよう⁽²⁾。

1 南葛飾郡町村位置・区劃、地勢

この南葛飾郡は、隅田川の左岸から江戸川の右岸にかけての地の大部分をその範囲とし、20町村からなる。

西端は、隅田川の左岸にあり、東京市成立の際に東京市区となった本所区・深川区という東京市と隣接し、あるいは隅田川を介して東京市と対面する6ヵ町である。これら諸町の位置・地勢をみる。

隅田町（「南葛飾郡ノ西北部。東：荒川放水路ヲ隔テ、南綾瀬町及本町ノ一部ニ対ス、西：北豊島郡南千住町、南：寺島町、北：南足立郡千住町」）「本町ノ土地概ネ平坦ニシテ起伏ナシ。隅田川ニ接スル西南部ノ地勢ハ極メテ卑湿ナル低地ナレドモ東部ニ至ルニ從ヒテ次第ニ高地トナル。隅田川及梅若堀ハ水運ノ便ニ富ミ西部一帯ハ工業区域ニシテ、東部ニ於テハ近來住宅地トシテ發展セリ」、吾嬭町（「小松川町及荒川放水路ヲ隔テ本町ニ境ス、西：東京市本所区ニ接ス、南：北十間側を隔テ亀戸町ニ相對ス、北：寺島町及隅田町ノ一部ニ隣接ス」）「東北ハ荒川放水路ニ、東南ハ中川ニ、西南北十間川ニヨツテ圍繞セラレ、町ノ殆ンド三方ハ河川ニ臨ミテ舟運ノ便頗ルヨシ。土地ハ沖積層ヨリ成リ、平坦ニシテ卑湿ナル低地ナリ。町内ニ池沼極メテ多シ」、寺島町（「南葛飾郡ノ西部。東：吾嬭町、西：浅草区及本所区、南：吾嬭町、北：隅田町」）「本町ハ東京市ノ東部ニ位シ、地質悉ク粘土・砂礫等ノ沖積層ヨリ成リ、全町極メテ平坦ナリ」、亀戸町（「亀戸町ハ南葛飾郡ノ西南

部ニ位シ、西ハ横十間川ヲ隔テ、東京市本所区ニ接シ、南ハ豎川ヲ挟ミテ大島町ニ相對シ、東ハ中川ヲ以テ小松川町ニ境シ、北ハ北十間川ヲ隔テ、吾嬭町ニ接続スル」）「本町ノ四圍ハ河川、運河ヲ以テ圍繞セラレ舟運ニ便ス。地質ハスベテ沖積層ヨリ成リ、土地ノ高低殆ンドナク一帯ニ平坦ナル低地ヲナス」、大島町（「南葛飾郡ノ東南部。東：東京市深川区、西：小松川町、南：砂町、北：亀戸町」）「本町一帯ノ地方ハ総テ是レ沖積層ヨリ成レル地域ナルヲ以テ丘陵ノ起伏、土地ノ高低ヲ見ズ平坦ニシテ卑湿ナル低地ナリ。本町ノ四圍ハ河川・運河ヲ以テ圍繞セラレ町内至ル所ニ池沼多シ」、砂町（「南葛飾郡ノ西南部。東：荒川放水路ヲ隔テ葛西村、西：横十間川ヲ隔テ、東京市深川区、南：東京湾、北：小名木川ヲ隔テ大島町」）「本町ハ南ハ東京湾ニ臨ミ、東、北、西ハ夫々河川ヲ以テ圍繞セラル。地勢極メテ平坦且ツ卑湿ナル低地ニシテ、地質ハスヘテ沖積層ヨリ成ル地域ナル。海岸ニハ最近埋立テテ生ジタル新埋立地アリテ相当ノ地域ヲ占ム。運河ハ縦横ニ開鑿セラレ、諸所ニ凹地アリテ池沼甚ダ多シ」である。河川の河口にある低湿の地である。

東端は、江戸川を以って千葉県と劃される町村である。

金町（「南葛飾郡ノ北部。東：千葉県松戸町、西：新宿町、南：小岩町・奥戸町、北：水元村及埼玉県八木郷村」）「南葛飾郡ノ東北隅ニ位スル金町ハ南北ニ長ク東西ニ狭キ地形ヲナシ、東方江戸川ヲ隔テ、千葉県松戸町ニ對シ、所謂桜名所トシテ名高キ江戸川堤町ノ東境ニ長ク連ル。本町ノ地勢概シテ平坦、丘陵ノ起伏スルモノナク全面積ノ大部分ハ田圃ナレドモ、全町勝景ニ富ミ樹木ニ恵マレ且交通機關ノ便アリテ隣接小岩町ト共ニ南葛方面ニ於ケル好個ノ住宅地タリ」、小岩町（「南葛飾郡ノ東部。東：千葉県東葛飾郡市川町、西：鹿本村及奥戸町、南：篠崎村及鹿本村、北：金町及千葉県東葛飾郡松戸町」）「本町ハ大東京ノ最東端ニ位シ、東ハ江戸川ノ清流ニ臨ミ、土地概シテ平坦、展望開ケ広闊ナル田園地ニシテ、町内ニ樹木多ク、景勝ニ富ミ住宅地トシテノ好条件

ヲ備フ」，篠崎村(「南葛飾郡ノ東南部。東：千葉県中山町・行徳町，西：瑞江浦及鹿本村，南：瑞江村，千葉県南行徳村，北：瑞江村，松江町，千葉県南行徳村)「本村ハ東京府ノ東部南葛飾郡ノ最東端ニ位シ，土地極メテ平坦広闊ニシテ水田多ク丘陵ノ起伏セルヲ見ズ。東ハ江戸川ニ臨ミ風光明媚ナル景勝ノ地ナリ」，鹿本村(「南葛飾郡ノ東部。東：小岩町，篠崎村，西：松江町，南：瑞江村，松江町，北：奥戸町)「本村ハ西奥戸町・松江町ニ接シ，東小岩町・篠崎村ト境シ，南北ニ長キ狭長ノ地形ヲナス。村内極メテ平坦ニシテ土地ノ高低殆ンドナシ。面積ノ大部ハ田畑地ニシテ村ノ西部ヲ境川南地ニ貫流シ村内ノ灌漑ニ便セリ」，瑞江村(「南葛飾郡ノ東南部。東：篠崎村，千葉県南行徳村，西：松江町，南：葛飾村，北：鹿本村)「本村ハ東京府ノ最東端ニ位シ，江戸川ヲ隔テテ千葉県ニ対ス。村内一般ニ平坦ナル田畑地ヲナセドモ東部ニ至ルニ随ヒ稍々高地ヲナシ江戸川ニ沿フ地域ハ風光明媚ニシテ住宅地ニ適ス」，葛西村(「南葛飾郡ノ南端。東：千葉県東葛飾郡浦安町，西：荒川放水路ヲ隔テテ砂町ニ接ス，南：東京湾，北：瑞江村，松江町)「本村ハ南葛飾郡ノ南端ニ在リテ東京府ノ東端ニ位シ，土地平坦広闊ニシテ水田多ク，東ハ江戸川ヲ境ニ千葉県浦安町ニ対シ，西ハ荒川放水路ヲ堺トシテ砂町ニ隣リ，南ハ東京湾ニ面シテ渺々タル碧海ヲ隔テテ遥ニ房総ヲ望ミ，北ハ新川ヲ劃シ松江，瑞江ノ両町村ニ接シ，四囲河海ニシテ水清ク氣澄ミ，而シテ水産豊カニ水禽ニ富ミ潮干狩，投網，釣魚，銃獵等ノ清遊ニ適スル天恵地ニシテ，水運モ亦最モナリ」であり，土地平坦，低地である。

南は，東京湾に臨む砂町，葛西村(「南ハ東京湾ニ面」す)，砂町(「南ハ東京湾ニ臨」む)である。

北は，埼玉県東葛飾郡，東京府南足立郡，に接する。

水元村(「南葛飾郡ノ北端。東：埼玉県北葛飾郡八木郷村，西：南足立郡東湊江村，南：金町及新宿町，北：北葛飾郡戸ヶ崎村及南埼玉郡潮止村)「本村ハ南葛飾郡ノ最北端ニ位シ，全村平坦ナル田畑地ニシテ丘陵ノ起伏スルモノナシ」，亀青村(「南

葛飾郡ノ西北部。東：新宿町，西：南綾瀬町，南：本田町，北：南足立郡東湊江村)「本村ハ土地極メテ平坦ニシテ，東中川ヲ隔テ新宿町，奥戸町ニ対シ，南北ニ長ク東西ニ狭キ地形ヲナシ，全村住宅地ニ適ス」，南綾瀬町(「南葛飾郡ノ西北部。東：亀青村，西：荒川放水路ヲ以テ南足立郡千住町ニ境ス，南：本田町及隅田町，北：南足立郡綾瀬村及東湊江村)「本町ハ荒川放水路ノ東部ニ位シ，地勢平坦ニシテ丘陵ノ起伏スルモノナシ。綾瀬川ハ町ノ西部ヲ貫流シ南下シテ荒川放水路ニ注グ。綾瀬川沿域ノ地ハ概シテ低地ヲナシ東部ニ至ルニ随ヒテ次第ニ高地トナル傾向ヲ有スト雖モ，町全体ヨリ見レバ其ノ高低称スルニ足ラズ，最近住宅地著シク増加シ漸次都市化シツヽアリト雖モ尚畑地水田等農耕ノ地甚タ多シ。本町ノ一部大字柳原ノ地ハ荒川放水路ニ依リテ二分セラレ放水路以西ニ位セリ」などである。土地平坦，起伏はない。

東西の江戸川，隅田川(荒川)のほか，中川，綾瀬川などが北から南へと流れ，これが町村を画するものとなっている。水元村，亀青村，新宿町，本田町，奥戸町，小松川町，吾嬭町，大島町であるが，新宿町(「南葛飾郡ノ北部。東：金町，西：亀青村，南：奥戸町，北：水元村)「本町ハ地形東西ニ狭ク南北ニ長シ。西部ハ中川ヲ隔テヽ亀青村，東湊江ニ境シ，東南北ハ各々金町，奥戸町，水元村ニ接ス。全町概シテ高低ナク，一般ニ平坦ナル土地ニシテ，水戸街道ニ沿フ町並ヲ除ケバ水田畑地相連ル。町ノ西境ヲナガルヽ中川ハ舟運ニ便ス」，本田町(「南葛飾郡ノ中央。東：奥戸町，西：南綾瀬町及荒川放水路ヲ隔テ隅田町，南：吾嬭町，北：亀青村)「本町ハ土地概ネ平坦ナレドモ，全町ヨリ見レバ北部ヨリ南部ニ緩カナル傾斜地ヲナスト謂フヲ得ベシ」，奥戸町(「南葛飾郡ノ略中央。東：小岩町，西：本田町，南：松江町，北：新宿町及亀青村)「本町ハ一般ニ土地平坦ニシテ，半ハ田畑ナリ。僅ニ北部曲金，中部奥戸新田及西南部上平井，東南部下小松ノ地域人家ノ密集スルヲ見ル。河流トシテ特ニ江戸川上流ヨリ分岐セル西井堀，東井堀ノ両用水

ハ本町ヲ縦横ニ連結シテ荒川放水路ニ注ギ以テ本町内ノ灌溉ニ便ス」, 松江町(「南葛飾郡ノ南部。東: 瑞江町, 西: 小松川町, 南: 葛西町, 北: 奥戸町及鹿本町」)「松江町ハ西部ヲ荒川放水路ニ, 南部ハ新川ニ面シ, 東部ハ瑞江村ト境シ, 南北ニ狭長ナル地形ヲナス。全町殆ンド平坦ニシテ南方ニ向ツテ緩傾斜ヲナシ町内ニ湿润ナル低地シ」, 小松川町(「小松川町ハ南葛飾郡ノ中央部ニ位シ, 東ハ荒川放水路ヲ隔テ、松江町, 奥戸町ニ隣リ, 西ハ中川ヲ挟ミテ亀戸町及吾嬭町ニ接シ, 南端ハ東京湾ロニ突出シ, 北ハ荒川放水路ヲ以テ本田町ニ境ス」)「小松川町ハ東北方ハ荒川放水路ニ, 西南方ハ中川ニヨツテ圍繞セラレ南北ニ亘ツテ狭長ノ地形ヲナス。全町平坦ニシテ且ツ卑湿ナル低地多ク一ノ起伏ナシ」というように, 土地平坦, 低湿である。

この南葛飾郡町村の位置・区劃において従来の河川に加えて, 開鑿された荒川放水路が大きく作用した⁽³⁾。寺島町, 隅田町, 吾嬭町, 小松川町, 本田町, 奥戸町, 松江町, 葛西村, 砂町がこれに面し, これにより劃されている。

全体的に, 荒川の沖積平野で平坦で, 高低, 起伏がない。そのようななかで, 河口地域である東京湾に臨む地域は, 卑湿なる低地と表現され, 「町内ニ池沼極メテ多シ」(吾嬭町), 「諸所ニ凹地アリテ池沼甚ダ多シ」(砂町)という。

他方, 形成されている自然堤防が, 随所に僅かながらの微高地を形成する。

「村内一般ニ平坦ナル田畑地ヲナセドモ東部ニ至ルニ随ヒ稍々高地ヲナシ江戸川ニ沿フ地域風光明媚ニシテ住宅地ニ適ス」(瑞江村), 「本町ハ土地概ネ平坦ナレドモ全町ヨリ見レバ北部ヨリ南部ニ緩カナル傾斜地ヲナスト謂フヲ得ベシ」(本田町), 「綾瀬川沿域ノ地ハ概シテ低地ヲナシ東部ニ至ルニ随ヒテ次第ニ高地トナル傾向ヲ有スト雖モ, 町全体ヨリ見レバ其ノ高低称スルニ足ラズ」(南綾瀬町), 「本町ノ土地概ネ平坦ニシテ起伏ナシ。隅田川ニ接スル西南部ノ地勢ハ極メテ卑湿ナル低地ナレドモ東部ニ至ルニ従

ヒテ次第ニ高地トナル」(隅田町)。

そして, 「東ハ江戸川ノ清流ニ臨ミ, 土地概シテ平坦, 展望開ケ広闊ナル田園地ニシテ, 町内ニ樹木多ク, 景勝ニ富ミ住宅地トシテノ好条件ヲ備フ」(小岩町), 「東方江戸川ヲ隔テ、千葉県松戸町ニ対シ, 所謂桜名所トシテ名高キ江戸川堤町ノ東境ニ長ク連ル。本町ノ地勢概シテ平坦, 丘陵ノ起伏スルモノナク全面積ノ大部分ハ田圃ナレドモ, 全町勝景ニ富ミ樹木ニ恵マレ且交通機関ノ便アリテ隣接小岩町ト共ニ南葛方面ニ於ケル好個ノ住宅地タリ」(金町), などという宅地化の適切さを記している。

2 土 地

第1表は町村ごとの土地状況を示す。

南葛飾郡全体では, 土地面積中の耕地面積の割合は40.7%, 非耕地のそれは59.3%である。耕地面積中の田畑の内訳は, 田71.7%, 畑28.3%である。

耕地率が高いのは, 鹿本村87.8%, 瑞江村69.1%, 水元村64.9%, 亀青村62.2%, 奥戸町53.6%, 新宿町53.3%, 篠崎村53.2%, 葛西村51.9%である。その他南綾瀬村が44.5%で全町村平均を上回るが, これら9町村以外は全町村平均を下回るのである。

この耕地率がきわめて低い, すなわち非耕地率が高いのは, 隅田町100%, 寺島町99.7%, 吾嬭町98.6%, 小松川町98.4%, 亀戸町98.1%, 砂町96%である。その他では本田町69.1%, 金町65.2%, 松江町60.2%が全町村平均を上回っているが, それは大きくはない。

この非耕地率がきわめて高い町村は, 産業構成上では農業が小さくなっているところであるが, これらの町村は, いずれも荒川放水路の右岸, 西側地域にある。すなわち, 東京市とは深川区, 本所区と直接接する, ないし隅田川を介して連なるところである。後の向島区, 城東区, そして, 江戸川区でありながら唯一荒川放水路西側地である。市域編入後の城東区域は96.0%, 向島区域は93.9%である。また, それらに準じ

て高いのは、荒川放水路東側ではあるが、それ に面している地域である。

第1表 土 地

	土地坪数		町歩換算			耕地面積 (水田・畑)			非耕地面積
	坪	町・反・畝・歩	町・反	町・反	町・反	町・反	町・反	町・反・畝	
小松川町	1,287,440	429.1.4.20	7.5(1.9 5.6)	1.6%(25.3% 74.7%)				421.6.5	
松 江 町	2,719,475	906.4.9.09	360.5(265.2 95.3)	39.8%(73.6% 26.4%)				545.9.9	
葛 西 村	3,414,620	1138.2.0.20	591.4(519.7 71.7)	51.9%(87.9% 12.1%)				546.8.0	
瑞 江 村	2,164,388	721.4.6.08	498.7(387.5 111.2)	69.1%(77.7% 12.1%)				222.7.6	
鹿 本 村	973,920	324.6.4.00	285.0(178.0 107.0)	87.8%(62.4% 31.6%)				39.6.4	
篠 崎 村	1,711,848	570.6.1.18	303.3(237.0 66.3)	53.2%(62.4% 31.6%)				267.3.2	
小 岩 町	1,512,250	504.0.8.10	179.1(106.5 72.6)	35.3%(59.5% 31.6%)				324.9.8	
(小計)	13,783,941	4594.6.4.21	2225.5(1695.8 529.7)	48.4%(76.2% 33.8%)				2369.1.5	
金 町	1,371,538	457.1.7.28	159.0(56.7 43.3)	34.8%(73.6% 26.4%)				421.6.5	
水 元 村	1,786,565	595.5.2.05	384.1(241.1 143.0)	64.9%(62.8% 37.2%)				211.4.2	
新 宿 町	797,693	265.8.9.23	141.6(86.1 55.5)	53.3%(60.8% 39.2%)				124.3.0	
奥 戸 町	2,626,305	875.4.3.15	468.9(315.5 153.4)	53.6%(67.3% 32.7%)				406.5.4	
本 田 町	1,511,290	503.7.6.10	155.4(123.4 32.0)	30.9%(79.4% 30.6%)				348.3.6	
亀 青 村	1,231,478	410.4.9.08	255.3(190.7 64.8)	62.2%(74.6% 25.4%)				154.9.9	
南 綾 瀬 町	1,497,375	499.1.2.15	222.3(149.6 72.7)	44.5%(67.3% 32.7%)				276.8.3	
(小計)	10,822,244	3607.4.1.14	1786.8(1196.5 590.3)	49.5%(67.0% 33.0%)				1820.6.2	
吾 嬬 町	1,189,430	396.4.7.20	7.4(4.9 0.5)	1.4%(90.7% 9.3%)				391.0.8	
隅 田 町	536,333	178.7.7.23	0(0 0)	0%(0% -)				178.7.8	
寺 島 町	629,805	209.9.3.15	0.7(0 0.7)	0.33%(0.00 100.0)				209.2.4	
(小計)	2,355,568	786.1.8.28	6.1(4.9 1.2)	6.1%(80.3% 19.7%)				780.0.8	
亀 戸 町	778,938	259.6.4.18	4.9(4.6 0.3)	1.9%(93.9% 6.1%)				254.7.5	
大 島 町	589,910	196.6.3.20	0(0 0)	0%(0% -)				196.6.4	
砂 町	1,613,838	537.9.4.18	35.3(9.7 25.6)	6.6%(35.6% 64.4%)				502.0.4	
(小計)	2,985,686	994.2.2.26	40.2(14.3 25.9)	4.0%(35.6% 64.4%)				954.0.4	
合 計	29,944,439	9,982.4.7.29	4,058.6(2,911.5 1,147.1)	40.7%(71.7% 28.3%)				5,923.8.4	
右 岸	6,628,694	2,209.5.6.14	53.8(21.1 32.7)	24.3%(39.2% 60.8%)				2,155.9.3	
左 岸	23,315,745	7,772.9.1.15	4,004.8(2,890.4 1,119.4)	51.5%(72.1% 27.8%)				3,767.9.1	
								48.5%	

註 1) 各町村「現状調査」の「面積」、「耕地面積」より作成。
 2) 各町村下段は耕地、非耕地の構成比、()内は耕地の田畑構成比。
 3) 右岸は荒川放水路右岸7ヵ町、左岸は荒川放水路右左岸14ヵ町村。以下各表同じ。

これに対して、耕地率が高い町村は郡の東南部、北部に位置するものに多いといえる。後の江戸川区域は51.6%、葛飾区域は50.5%である。

このように、各町村の土地利用における差異は、その町村の東京市との連結・遠近と荒川放水路の右岸、左岸というその位置関係において生じている。

耕地における田畑の構成は、全町村で田71.7%、畑28.3%である。その際、非耕地率のきわめて高い向島区域が田80.3%と高いが、これはわずかに残存している耕地についてのものであり、その高低は地域差の検討には意味がない。水田率が高いのは、葛西村87.9%、本田村79.4%、瑞江村77.7%、亀青村74.6%、松江長73.6%などである。耕地率の高い町村は水田率が高いが、それらが多い江戸川区域は76.2%、葛飾区域は67.0%である。この東葛飾の地は元来低湿の地であり、水田農業であることが示されている。

このようななかで、耕地率の高い町村にあって、鹿本村、水元村、新宿町、篠崎村などは畑地率が相対的に高いが、低湿地域とされるなかでも畑地の大きいことは、畑作農業のもつ意味と農地の宅地化という土地利用転換の進行における意味において留意することを要するであろう。

3 交 通

この南葛飾郡町村の交通は、従前、陸上交通路と河川・海上交通路とによった。陸上交通の主要街道の第一は、千住に発し、新宿、小金、我孫子、取手の宿を経て、さらにその先の土浦などの宿を経て水戸に至る、南葛飾郡の南綾瀬町、亀青村、新宿町、金町を通る水戸街道（陸前浜街道）である。第二には、江戸に発し、亀戸町、小松川町、松枝町、鹿本村、小岩町を通過して千葉県市川町に入る千葉街道である。河川路は江戸川、中川、綾瀬川、荒川（隅田川）が北から南に流下し、これらをつなぐ小名木川、

新川が東西に流れていた。近代になってからは、鉄道・軌道路が主役になり、河川舟運、陸上では乗合自動車となった。その際、この時点に至る過程では、荒川放水路の開鑿がその東西を劃し、新たな河川路としての役割を果たすことによる変化がもたらされた。以下、この時期の交通路をみる。

第一は鉄道である。

鉄道は、1898（明治31）年開通の常磐線（設置時は日本鉄道常磐海岸線）は本郡の北部を、南綾瀬町をわずかに一部を横切るように、亀青村・新宿町の北部、そして金町を東西に通過する。「上野ヲ起点トセル本線ハ本町ノ北部ヲ横断ス。本町内ニハ駅ヲ有セズ。本町ニテハ町境ニ最モ近キ亀有、金町ノ両駅ヲ利用ス」という駅のない新宿町と比較すると駅がある亀青村、金町の利便は大きいことはいうまでもない。しかし、京成電車金町線もある金町はともかくも、それにより亀青村が顕著に発展したとはいえないようである。

もう一つの鉄道である総武鉄道会社総武線は1894（明治27）年に本所（現在の錦糸町）～佐倉間が開通。郡内は亀戸町、鹿本村、小岩村、奥戸町、小松川町を通過する。

各町村は、「両国ニ発シ房総方面ニ至ル総武本線ハ本町ヲ東西ニ貫キ町ノ中央部ニ亀戸駅アリ。目下両国、秋葉原間ノ高架線ハ工事中ニシテ之ガ完成セバ総武線ト山手・中央線ヘノ連絡成リ、同時ニ総武線ノ電化ヲ見タル暁ハ、本町ノ交通ハ益々其ノ便ヲ加フベシ」（亀戸町）、「両国ヲ起点トシ千葉方面ニ至ル総武本線ハ本町ノ中央ヲ東西ニ貫通シ、本町大字下小岩ニ小岩駅有リ。将来、両国、秋葉原間ノ高架線完成シ、総武線ノ電化ヲ見タル時ハ本町ノ交通益々便ヲ加フベシ」（小岩町）、「総武本線ハ本町ノ中央部ヲ東西ニ縦貫シ、町内ニ平井駅ヲ有ス」（小松川町）などの駅を有する町の発展は著しく、また、「総武本線ハ小松川町ヨリ荒川放水路ヲ通過シ本町南部ヲ過ギ鹿本村、小岩町ニ入りテ千葉方面ニ走ル。昭和四年十月新ニ本町内ニ新小岩駅

ヲ設置セラレタルヲ以テ本町ノ交通ニ利便ヲ与フル所至大ニシテ、之ガ為全駅附近八年ヲ追フテ住宅建築セラレ、漸次住宅地化シツヽアリ」(奥戸町)と新たに駅が設けられたことによる変化が始まった。そして、鹿本村は「総武線ハ本村ノ北端ヲ東西ニ掠メ去リ、村内ニ停車場ナシ。隣接小岩町ニ所在スル小岩駅最モ近クシテ多ク利用サル。奥戸町所在スル新小岩駅モ亦本村ニ近シ」と隣接する便があるが、「近来住宅地漸次加フルニ至レ」るものの「未ダ純農村ノ域ヲ脱」しないのであり、駅設置の有無は発展・停滞の大きな要因となる。

第二は軌道電車であるが、東武鉄道電車、京成電車、城東電車がある。

東武鉄道電車は、本線、亀戸線(曳舟駅～亀戸駅)である。「曳舟駅ヨリ分岐セル亀戸線ハ、本町ノ中央部ヲ西北ヨリ東南ニ貫通シテ総武線亀戸駅ニ連絡ス。町内ニ虎橋通、十間橋通、小村井、平井街道ノ四停車場アリ」(吾嬬町)、「当町ノ中部ヲ南北ニ貫キ町内ニ鐘ヶ淵駅アリ」(隅田町)、「本町ノ中央部ヲ南北ニ貫通シ、町内ニ曳舟・玉ノ井ノ二駅アリ」(寺島町)、「曳舟駅ヨリ分岐シ吾嬬町ヲ経テ本町ニ入り総武線亀戸駅ニ合スル線ニシテ町内ニ左ノ二駅アリ。亀戸、北十間」(亀戸町)である。

京成電車は、本線、日暮里線、金町線である。本線は押上駅を始点として、千葉、成田方面に至る。支線金町線は高砂駅で分岐し金町駅に至り、支線日暮里線は1931(昭和6)年12月開通、青砥駅にて分岐、千住、三河島を経て日暮里に至る。なお、白鬚橋に至る支線がある。

「京成電車ハ本町ノ東北部ヲ貫通シ、本町大字伊予田ニ江戸川停留所ヲ置ク。尚同電車ハ本町大字上小岩ニ停車場新設ノ計画アリテ近ク起工スル予定ナリ」(小岩町)、「京成電車ハ高砂ヨリ分岐シテ本町ノ西南端ヨリ北上シ、常磐線金町駅ニ連絡ス。町内ニ柴又、金町ノ停留所ヲ有ス」(金町)、「高砂ニ分岐セルシ京成電車金町線ハ本町ノ東部ヲ掠メ去リ、本町ニハ停車場ナキモ柴又駅ハ本町ニ比較的近シ」(新宿町)、「本町ノ北西

部ヲ通過ス。本町内ニ高砂駅アリ。高砂駅ハ此処ヨリ金町線ヲ分岐シ、京成電車ノ要路ニアタル」(奥戸町)、「本町ノ略々中央部ヲ東西ニ貫通シ、町内ニ四ツ木、立石、青砥ノ三停車場アリ。昭和六年十二月開通セル京成日暮里線ハ青砥駅ヨリ分岐シ本町ノ北方境界ニ並走ス。町内御花茶駅アリ」(本田町)、「本町ノ南部ヲ掠メ去リ、本村ヲ去ル数丁ニシテ本田町ノ青砥駅アリテ交通至便ナリ」(亀青村)、「京成電車日暮里線ハ……本町ノ南部ヲ東西ニ貫通シ、千住町ニ入り三河島町ヲ経テ日暮里ニ至ル。町内ニ堀切菖蒲園、関屋ノ二駅アリ」(南綾瀬町)、「本町ノ東南部ヲ通過シ町内ニ荒川停留所ヲ有ス」(隅田町)、「押上駅ヲ起点トスル京成電車ハ本町ノ東部ヲ通過シテ吾嬬町ニ入り、千葉・成田方面へ走ル。同電車ノ支線ハ本町ノ北部ヲ横断シテ白鬚橋ニ至ル。町内ニ曳舟・向島・長浦・玉ノ井・白鬚橋ノ五停留所アリ」(寺島町)。

城東電車は錦糸堀を始点とし、小松川線(1917・大正6年開通)、砂町線(1924・大正13年7月、亀戸町稻荷前まで開通、1927・昭和2年3月洲崎東陽公園前迄延長)がある。

「城東電車ハ水神森ヨリ分岐シ本町ノ中央ヲ南北ニ貫通シテ砂町ニ入り須崎ニ至ル。町内ニ堅川通、大島、小名木川ノ三停留所アリ」(大島町)、「亀戸町、水神森ヨリ分岐シ大島町ヲ経テ本町ニ入ル。城東電車砂町線ハ大正十三年七月、本町稻荷前マデ開通シ、更ニ昭和二年三月洲崎東陽公園前迄延長セリ。町内ニ左ノ停留所アリ。砂町、境川、仙気稻荷、豊平橋、東平野町」(砂町)、「錦糸堀ヲ始発点トシテ町内ヲ東西ニ貫通セル小松川線及水神森ニ分岐セル砂町線アリテ、町内ニ十ヶ所ノ停留所ヲ有ス」(亀戸町)、「小松川線ハ……、町内線路延長五五八米、新町、小松川、西荒川ノ三停留所アリ」(小松川町)である。

第三は乗合自動車で、いくつかの乗合自動車会社の路線がある。

小松川乗合自動車商会経営の乗合自動車は、小松川停留所(小松川町)から平井駅間である。

葛飾乗合自動車株式会社経営は「乗合自動車

線ハ小松川町城東電車終点ヲ初発点トシテ本町ヲ通過シ千葉県市川及八幡方面及浦安町方面ニ至ル」(松江町)とあるように、小松川町城東電車終点の西荒川駅を起点とする西荒川停留所～浦安間、西荒川停留所～市川町間がある。郡内の小松川町、松江町、瑞江村、鹿本村、篠崎村、小岩町を通過する。

葛西乗合自動車は、「砂町ヲ初発点トシ瑞江村上今井間ヲ運転シ本町南側部ヲ通過ス」(松江町)とというように砂町起点、松江町をへて、瑞江村に至る間を運転する。

上今井乗合自動車株式会社の乗合自動車は、葛西橋・上今井間、すなわち、葛西村と瑞江村との間である。

京水モーターバス株式会社の乗合自動車は、「南千住ヲ起点トシ金町駅ニ至ル乗合自動車ハ本村六号国道ヲ通過ス」(亀青村)とあるように南千住を起点とし、南綾瀬町、亀有村、新宿町をへて金町に至る。

なお金町からは、渡辺自動車商会乗合自動車(金町～千葉県流山間)、越谷自動車商会乗合自動車(金町～埼玉県吉川間)がある。

上平井乗合自動車は、「四ツ木・奥戸町上平井間、四ツ木・立石間 上平井乗合自動車株式会社経営」(本田町)は奥戸町四ツ木～本田町間である。

四ツ木乗合商会乗合自動車は、「亀有駅ヲ起点トシ四ツ木駅ニ至ル乗合自動車ハ本村ノ西部ヲ通過ス」(亀青村)は、とあるように、亀有駅～奥戸町四ツ木間である。

隅田乗合自動車は、「浅草区吾妻橋際ヨリ発シテ本町鐘ヶ淵ニ至ル」(隅田町)、「浅草雷門ヲ始発点トスル隅田乗合自動車ハ本町ニ入りテ分岐シ、一ハ玉ノ井ヲ経テ隅田町方面ニ走り、一ハ本町白鬚橋ニ至ル」(寺島町)というように、浅草区吾妻橋際、あるいは雷門起点とし、隅田町鐘ヶ淵、寺島町白鬚橋に至る。

堀切乗合自動車は、「千住方面ヨリ本町ノ北部ヲ通過シ堀切駅前ヲ経テ金町方面ニ至ル」(隅田町)。

東京乗合自動車(青バス)は、「亀戸駅前ヲ始発点トシテ十三間通ヲ北上シ左折シテ天神橋通ヲ西走シ、市内ニ入り浅草・上野方面ニ至ル」(亀戸町)。

城東電気軌道株式会社の乗合自動車は、大島四丁目・亀戸町浅間停留所前」(大島町)。

これらのほかに伊藤乗合自動車商会(砂町・上今井間)(瑞江村)があるが、葛西乗合自動車線と同一のようである。

第四は、水運である。

葛飾汽船株式会社は、「葛飾汽船株式会社ノ経営スル深川高橋・千葉県浦安間ノ航路ハ本町南側小名木川ヲ通過シ、町内ニ大島一丁目及八丁目ニ発着場アリ」(大島町)、深川区ヨリ千葉県浦安町ニ至ル」(砂町)とあるように、深川区高橋～千葉県浦安間で、小名木川通過する。

東京通船会社船は、「両国西詰及深川区高橋ヨリ千葉県浦安ニ至ル」(砂町)、「千葉県浦安～深川区高橋間、以上ノ外、荒川放水路、江戸川、新川等、本村ハ四囲舟運ノ便ニ恵マル」(葛西村)、「町内四ヶ所ニ発着場ヲ有ス」(松江町)、「浦安～深川区高橋間」(瑞江村)、「両国橋及高橋ヨリ発シテ千葉県浦安町ヲ経テ江戸川ヲ遡リテ遠ク銚子町、霞ヶ浦沿岸各地、栃木県新波方面ニ至ル東京通船株式会社ノ乗合蒸気船ヲ以テ唯一ナルモノトス」(篠崎村)とあるように、深川区高橋～千葉県浦安間で、大島町、砂町、松江町、瑞江村、葛西村、篠崎村を通過する。

千住吾妻蒸気船会社の乗合蒸気船が、「千住吾妻汽船会社ノ乗合蒸気船ハ隅田川ヲ上下スルモノニシテ、本町ノ西北河岸ニ鐘ヶ淵発着場ヲ有セリ。其他本町ハ河川運河ニヨル貨物ノ運輸極メテ便ニシテ本町工業ノ発展ヲ助成セリ」(隅田町)、「千住吾妻汽船会社ノ乗合蒸気船ハ本町白鬚橋際ニ発着所ヲ有ス」(寺島町)と、隅田川を上下する。

東京巡航船会社は、「日本橋蠣殻町ヨリ砂町丸人橋ニ至ル」(砂町)。

なお、以上は旅客を念頭とするものであるが、物資の搬送の大きいことは、「本町ハ東荒川方水

路ニ臨ミ、西中川ニ沿ヒ、南東京湾ロニ突出シテ水上ノ便ニ恵マル」(小松川町)、「本町ハ西方荒川方水路ニ臨ミ、東南部ニ中川、曲折シテ奥戸町ト境ス。本町ハスクノ如ク三方河川ニ囲マレ舟運ノ便ニ富ミ貨物ノ運送ニ便ス」(本田町)、「(水運、陸上ノ交通ト共ニ本町ハ荒川方水路及綾瀬川ニ依ル舟運ノ便ハ貨物ノ運輸ニ適セルヲ以テ・・・)」(南綾瀬町)、「荒川放水路、中川、北十間川等本町ノ周囲ハ三方河川ノ包囲スル所ニシテ舟楫ノ便極メテ良シ」(吾嬬町)、「隅田川、曳舟川ニヨル舟運ノ便ハ貨物ノ輸送ニ便シ本町工業ノ隆盛ヲ助成セリ」(寺島町)「河川運河ハ本町ノ四囲ヲ圍繞シテ舟楫ノ便極メテヨク、貨物ノ運送其ノ他ニ便セルコト他町ニ比ヲ見ザル所ナリ。舟運ニ便セル河川ノ主ナルモノハ北十間川、中川、横十間川、竪川等ナリ」(亀戸町)という記述から窺うことができる。

このように従来ノ舟運に加えて、鉄道・軌道、そして乗合自動車路線網が形成されているが、鉄道・軌道は通過することもなく、最寄の京成電車「金町駅ニ至ル距離約十五丁ナリ」と近くないうえに「乗合自動車 ナシ」、「本村ハ交通機関不備ニシテ村ノ発展ヲ助長スルモノナク、隣接諸町村ノ急速ナル発展ニ取り残サレタル感アリ」という水元村に示されるように、交通機関の不備が地域を立ち遅れを齎すのである。

4 物産額

第2表は町村ごとの物産類と物産構成を示す。物産額の産業別構成は農産額1.4%、畜産額1.0%、水産額1.5%、工産額96.1%であり、圧倒的ウエイトを占める工産が、生産額の大きさをもたらす。生産額を町村別にみると、大島町が20.4%を占めて最大で、ついで、亀戸町15.3%、吾嬬町15.2%、砂町15.0%、寺島町9.9%、隅田町7.9%が大きく、さらに奥戸町6.1%、小松川町5.0%、新宿町2.4%となる。これらの生産額の大きい町村は、その生産額における工産額のウエイトが大きく、大島町99.7%、亀戸町99.4%、吾嬬町99.95%、隅田町99.98%と、100%に近

く、砂町も93.9%、寺島町も92.6%である。これらの町村は生産は工業生産に特化し、それによって大きな生産額となっている。小松川町は生産額はこれらには及ばないが、99.6%と工業産額のウエイトは大きく、工業が発展している。これらの諸町は荒川放水路の右岸、西側地域にあるが、ここには工業の発展が顕著である。その他、篠崎村、本田町、金町、亀青村も工産額は90%を越える。

物産額構成比1.4%と小さい農産額であるが、生産額が最大は奥戸町で全郡農産額の20.8%、ついで松江町13.5%、瑞江町11.9%、水元村7.7%、鹿本村5.4%などとなるが、これらが主要農産地である。これら町村の物産額構成中の農産額比率は、鹿本村73.1%、水元村63.1%、瑞江村48.6%、奥戸町39.5%、松江町34.3%と農産額のウエイトが大きいが、農業が主要な営みであるところであるといえる。

物産額構成比1.0%の畜産は、寺島町に71.6%が集中し、ついで大島町6.2%、亀青村3.5%などとなる。農業地域において細々とみられると共に工業化された寺島町、大島町などにみられるが、物産構成の上でのウエイトは寺島町が7.5%で最大である。物産額構成比1%と農産より大きい水産は砂町57.1%、葛西村31.0%で、奥戸町6.5%、瑞江村6.5%で、これらが水産地である。砂町、葛西村は東京湾に面するところである。水産の物産構成比は、葛西村55.4%、奥戸町16.2%、瑞江村は19.4%で、葛西村はことに大きく、これらは水産地である。最大の産額のある砂町は、町物産額の0.06%に過ぎないが、郡第一の水産地である。

5 会社・工場

(1) 会社

第3表は町村ごとの会社を示す。

会社は各形態合計211が、南葛飾郡に所在する。株式会社84、合名会社23、合資会社50である。これらの会社が全くないのは、鹿本村、篠崎村、水元村の3カ村であり、これを除く17カ

東京市域拡張期における南葛飾郡町村の状況（神立春樹）

町村に展開している。

第2表 物産額

	農産物	畜産物	水産物	工産物	合計	
小松川町	—	34,528	16,619	12,305,687	12,356,834	5.0 %
	—	0.28%	0.13%	99.6%	100.0%	
松江町	455,955	74,033	9,415	766,783	1,296,186	0.52%
	34.3%	5.7%	0.73%	59.2%	100.0%	
葛西村	341,429	25,031	1,172,496	576,390	2,115,346	0.85%
	16.1%	1.2%	55.4%	27.2%	100.0%	
瑞江村	401,552	69,686	160,057	204,840	836,135	0.34%
	48.6%	8.4%	19.4%	24.8%	100.0%	
鹿本村	182,861	7,287	—	60,060	250,211	0.10%
	73.1%	2.9%	—	24.0%	100.0%	
篠崎村	260,765	1,499	10,650	4,307,310	4,580,224	0.18%
	5.7%	0.03%	0.23%	94.0%	100.0%	
小岩町	154,777	16,203	—	82,926	253,906	0.10%
	61.0%	6.4%	—	32.7%	100.0%	
(小計)	1,787,339	228,267	1,369,237	18,303,999	21,686,847	8.7 %
	8.2%	1.1%	6.3%	89.0%	100.0%	
金町	116,480	19,342	200	2,802,949	2,938,971	0.12%
	4.0%	0.66%	0.00%	95.4%	100.0%	
水元村	259,816	58,248	1,525	92,250	411,839	0.17%
	63.1%	14.1%	0.37%	22.4%	100.0%	
新宿町	123,250	20,353	—	5,903,225	6,046,828	2.4 %
	2.0%	0.34	—	97.6%	100.0%	
奥戸町	599,306	16,174	245,850	657,121	1,518,451	6.1 %
	39.5%	1.1%	16.2%	43.3%	100.0%	
本田町	68,240	15,576	—	3,766,855	3,850,671	1.5 %
	1.8%	0.04%	—	97.8%	100.0%	
亀青村	128,625	89,030	—	2,859,427	3,077,082	1.2 %
	4.2%	2.9%	—	92.9%	100.0%	
南綾瀬町	222,734	21,060	—	907,483	1,151,277	0.46%
	18.3%	1.7%	—	74.5%	100.0%	
(小計)	1,518,451	239,783	247,575	16,989,310	18,995,119	8.7 %
	8.0%	1.3%	1.3%	89.4%	100.0%	
吾嬬町	—	11,398	6,255	37,879,420	37,897,073	15.2%
	—	0.03%	0.02%	99.95%	100.0%	
隅田町	—	3,779	—	19,557,664	19,561,443	7.9 %
	—	0.02%	—	99.98%	100.0%	
寺島町	—	1,835,843	—	22,839,374	24,675,217	9.9 %
	—	7.5%	—	92.6%	100.0%	
(小計)	—	1,851,020	6,255	80,276,458	82,133,733	33.0 %
	—	2.3%	0.08%	97.7%	100.0%	
亀戸町	—	22,300	—	38,010,955	38,033,255	15.3 %
	—	0.06%	—	99.9%	100.0%	
大島町	—	158,588	—	50,564,768	50,723,356	20.4 %
	—	0.31%	—	99.7%	100.0%	
砂町	61,257	65,767	2,164,051	35,149,191	37,440,266	15.0 %
	0.16%	0.18%	0.06%	93.9%	100.0%	
(小計)	61,257	246,655	2,164,051	123,724,914	126,196,877	50.7 %
	0.05%	0.20%	1.7%	98.0%	100.0%	
合計	3,367,047	2,565,725	3,787,118	239,294,691	249,014,571	100.0 %
	1.4%	1.0%	1.5%	96.1%	100.0%	
右岸	61,257	2,132,203	2,186,925	216,307,059	220,687,444	88.6 %
	0.08%	0.67%	0.99%	98.0%	100.0%	
左岸	3,305,790	433,522	1,600,193	22,987,632	28,327,137	11.4 %
	11.7%	1.5%	5.6%	81.2%	100.0%	

註 1) 各町村「現状調査」の「主要生産物産額」より作成。

2) 各町村等の下段は当該町村の物産構成比。各町村等の合計右欄は全体中のその町村等の占有率。

第3表 会社数

	会社種別				会社資本金		
	株式	合名	合資	合計	50万	500万	1000万
小松川町	8	0	10	18	3	0	0
松江町	3	0	1	4	0	0	0
葛西村	1	0	0	1	0	0	0
瑞江村	1	0	0	1	0	0	0
鹿本村	0	0	0	0	0	0	0
篠崎村	0	0	0	0	0	0	0
小岩町	1	0	0	1	0	0	0
(小計)	14	0	11	25	3	0	0
金町	1	0	3	4	0	0	0
水元村	0	0	0	0	0	0	0
新宿町	0	0	1	1	0	0	0
奥戸町	2	0	0	2	0	0	0
本田町	4	2	4	10	0	0	0
亀青村	0	0	2	2	0	0	0
南綾瀬町	1	1	4	6	0	0	0
(小計)	8	3	14	25	0	0	0
吾嬬町	6	4	6	16	2	0	1
隅田町	5	3	4	12	0	0	2
寺島町	13	5	19	37	1	0	2
(小計)	24	12	29	65	3	0	5
亀戸町	17	3	27	47	1	1	2
大島町	14	5	20	39	2	4	1
砂町	7	0	3	10	1	3	1
(小計)	38	8	50	96	3	8	4
(合計)	84	23	104	211	9	8	9
右岸	70	20	89	179	9	8	9
左岸	14	3	15	32	0	0	0

註 1) 各町村「現状調査」の「会社」より作成。

区域別には江戸川区域25、葛飾区域25、向島区域65、城東区域96である向島区域、城東区域に集中している。特に亀戸町、大島町、寺島町に多く、その他の3カ町がそれにつづくが、この両区域以外では、このその他3カ町に準ずるのは小松川町、本田町である。

会社のうち資本規模50万円以上は26社であるが、すべて株式会社である。そのうちの23社が向島区域、城東区域であり、500万円以上のみの17はすべてこの両区域である。そして、この両区域の6カ町のいずれにも1000万円以上の株式会社がある。

この両区域6カ町に同じく荒川放水路右岸の西地域の小松川町を含めて、荒川放水路西地域においては会社が集中し、資本的経済活動が盛んである。

(2) 工場

第4表は町村ごとの工場数を示す。

先に物産額の96.1%が工産物であることをみた。それは向島地区、城東地区において97.7%、98.0%であるが、江戸川地区、葛飾地区においても88%台であった。工業生産の発展による。ここでは、それを生み出す工場をみる。

ここには1200の工場がある。職工数は3万8835人である。染織工場191、1万7222人、機械387工場、8659人、化学392工場、9492人、飲食物64工場、1074人、雑159工場、2164人、特別7工場、287人である。

工場は吾嬬町が最多で223、職工数1万0969人、ついで亀戸町269工場、8606人、寺島町178工場、3170人、大島町158工場、3170人で、これらと同じ向島・城東地区の隅田町71工場、4524人、砂町69工場、2129人である。この両地区で工場の80.6%、職工数の87.6%を占めることになる。これらの他では、本田町78工場、1361人、小松川町66工場、1186人が多いが、その属する江戸川地区は工場数の8.9%、職工数の4.9%、葛飾地区はそれぞれ10.4%、10.0%に過ぎない。向島・城東地区に小松川町を加えた右岸地域は工場の6.2%、職工数の90.6%を占める。荒川右岸地域は工業地域となっているのである。左岸地域では本田町が工場数は隅田町、砂町より多い。荒川放水路により分断されたが、「荒川放水路及中川ニ依ル舟運ノ便ハ本町ノ一部ヲ工場地帯トナセル」と記している。

各町村が記載するものに、鐘ヶ淵紡績、東洋車輛会社(隅田町)、日清紡績、東洋モスリン、日本化学工業(亀戸町)、大成化学工業株式会社工場、日東硫肥工場、大阪鉄板製造所、中央製鋳工場、大日本人造肥料工場(小松川町)などがある。

東京市域拡張期における南葛飾郡町村の状況（神立春樹）

第4表 工場

	染織	機械	化学	飲食物	雑	特別	合計
小松川町	10 - 134 25 105	16 - 192 177.5 189	19 - 584 4062.7 567	10 - 169 223 155	10 - 99 26 85	1 - 8 0 8	66 - 1186 4514.2 1109
松江町	10 117 32 100	1 16 5 13	4 47 40.5 45	3 25 9 11	5 28 8 22	— —	23 - 233 94.5 191
葛西村	2 - 47 4 31	— —	1 - 9 7 9	— —	2 - 13 1 13	— —	5 - 69 75 53
瑞江村	1 - 5 2 5	1 - 5 3 - 5	1 - 13 21 13	— —	— —	— —	3 - 23 26 23
鹿本村	— —	1 - 24 3 - 24	— —	2 - 12 7 9	— —	— —	3 - 36 10 33
篠崎村	— —	— —	1 - 329 3780 270	— —	— —	— —	1 - 329 3780 270
小岩町	— —	1 - 5 0 - 5	2 - 17 4 8	1 - 7 3 7	2 - 13 2 11	— —	6 - 42 9 31
(小計)	23 - 303 63 241	20 - 242 188.5 236	28 - 999 7915.2 912	16 - 213 242 182	19 - 153 37 131	1 - 8 0 8	107 - 1918 8445.7 1710
金町	3 - 1115 1 245	1 - 60 0 6	2 - 10 2 8	2 - 15 7 13	1 - 10 1 10	— —	9 - 1210 11 332
水元村	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —
新宿町	— —	1 - 7 ? 7	2 - 532 ? 466	— —	— —	— —	3 - 539 ? 473
奥戸町	3 - 20 2 19	2 - 38 3 34	6 - 102 199.5 86	1 - 6 1 3	— —	1 - 6 0 6	13 - 172 40.5 148
本田町	32 - 709 49 441	12 - 86 40 304	26 - 512 30.5 86	1 - 7 5.5 7	7 - 47 17 29	— —	78 - 1361 142 867
亀青村	— —	3 - 32 11 18	4 - 359 0 - 294	1 - 8 2 4	— —	— —	8 - 399 13 316
南綾瀬町	3 - 29 4 25	3 - 33 2 33	6 - 122 3 73	— —	2 - 36 1 36	— —	14 - 220 10 167
(小計)	41 - 1873 56 730	22 - 256 54 238	46 - 1637 253 1227	5 - 36 15.5 27	10 - 93 19 75	1 - 6 0 - 6	125 - 3901 397.5 2303
吾嬬町	31 - 7306 6082 1479	74 - 1181 2588 1064	85 - 1663 7146 1100	7 - 68 45 64	26 - 741 785.5 588	— —	223 - 10959 16646.5 4295
隅田町	16 - 3356 2641 838	17 - 729 301 714	19 - 300 199 213	5 - 31 12 30	14 - 108 39 75	— —	71 - 4524 3192 1870
寺島町	27 - 428 98.5 297	50 - 1008 1049.5 825	59 - 1221 1749 819	4 - 67 20 64	38 - 446 216 329	— —	178 - 3170 3133 2334
(小計)	74 - 11090 8821.5 2614	141 - 2918 3938.5 2603	163 - 3184 9094 2132	16 - 166 77 158	78 - 1295 1040.5 992	— —	472 - 19653 22971.5 8499
亀戸町	42 - 3827 8909.5 1307	96 - 2290 2239.5 2145	96 - 2122 2308 1658	9 - 79 10.3 61	25 - 284 96.5 213	1 - 4 0 4	269 - 8606 13563.8 5388
大島町	11 - 129 49.5 91	74 - 2017 3656.4 1881	47 - 1089 1312 1001	12 - 191 373.5 176	11 - 76 108 64	3 - 126 7 124	158 - 3628 5506.4 3337
砂町	— —	34 - 936 2211.5 889	12 - 398 551 389	6 - 389 1147 302	16 - 263 374 235	1 - 143 188 132	69 - 2129 4471.5 1947
(小計)	53 - 3956 8959 1398	204 - 5243 8107.4 4915	155 - 3609 4171 3048	27 - 659 1530.8 539	52 - 623 578.5 512	5 - 273 195 260	496 - 14363 24232.3 10672
合計	191 - 17222 17899.5 4983	387 - 8659 12288.4 7992	392 - 9429 21433.2 7319	64 - 1074 1865.3 906	159 - 2164 1675 1710	7 - 287 195 274	1200 - 38835 55356.4 23184
右岸	137 - 1518 17805.5 4117	361 - 8353 12234.4 7707	337 - 7377 17327.7 5747	53 - 994 1830.8 852	140 - 2017 4645 1645	6 - 281 195 268	1034 - 35202 51027.4 20280
左岸	54 - 2042 945 866	26 - 306 54 285	55 - 2058 4105.5 1572	11 - 80 34.5 54	19 - 147 30 121	1 - 6 0 6	66 - 3633 4329 2904

註 1) 各町村「現状調査」の「工場」より作成。

2) 各町村の上段は工場数-職工数、下段は原動機馬力数、職工数中の男工数。

6 人 口

第5表は町村ごとの人口、第6は人口密度、増加率を示す1930年にこの南葛飾郡は47万9908人の現在人口である。地方県庁所在都市の多くを上回るものである。1920年にはすでに20万4531人であったが、この間25万5377人増加し、2.3倍となった。増加率は134.6%である。そして人口密度(1万坪当り)は68.3人が160.3人となった。

この人口及び増加は町村によって異なる。1920年に人口密度が大きいのは、亀戸町469、大島町326、寺島町302、隅田町272、吾嬭町258でこれらが抜群に大きい。いずれも城東地区・向島地区である。これらの諸町は人口数そのものが亀戸町3万8548人、大島町2万2333人、寺島町1万9159人、隅田町1万4607人、吾嬭町1万4609人と大きい。これらの他では砂町1万2184

人、小松川町8019人、本田町5875人で、人口密度はそれぞれ75、62、39であるが5町とは格段の小ささである。地区別には、人口密度は、城東地区245、向島地区167.2に対して江戸川地区28.6、葛飾地区25.6であり、二つの地区群には隔絶した差がある。すなわち、1920年には城東地区・向島地区は人口が大きく、稠密な地域となっていた。

1920～30年の10年間の増加率の大きいのは、小松川町397.9%、本田町366.2%、南綾瀬町339.0%、小岩町234.2%、金町210.1%である。この間に増加人口もそれぞれ3万1908人、2万1515人、1万5720人、1万0405人、6983人と大きく、人口はそれぞれ5.10倍、4.7倍、4.4倍、3.3倍、3.1倍となっている。また、人口密度もそれぞれ62から301、39から181、31から135、27から91、24から75へと大きく高まっている。いずれも江戸川地区・葛飾地区の諸町である。

第5表 人 口

	人 口									人口増加数		
	1920年			1925年			1930年			20/25	25/30	20/30
小松川町	8019	(4285	3734)	24135	(12775	11360)	39927	(20689	19238)	11161	15802	31908
松江町	7648	(3921	3727)	10998	(5653	5345)	17114	(8893	8221)	3359	6116	9466
葛西村	7688	(3939	3749)	8606	(4337	4269)	9326	(4766	4560)	918	720	1638
瑞江村	5744	(2861	2883)	6940	(3493	3447)	7836	(3941	3895)	1196	896	2086
鹿本村	2919	(1497	1422)	3083	(1597	1486)	3767	(1985	1782)	164	687	848
篠崎村	2918	(1481	1437)	3877	(1987	1890)	4153	(2031	2122)	959	275	1241
小岩町	4443	(2279	2164)	6891	(3505	3386)	14848	(7628	7220)	2448	7957	10405
(小計)	39379	(20263	19116)	64530	(33347	31183)	96971	(49933	47038)	25151	32441	57592
金 町	3324	(1669	1655)	7669	(3554	4115)	10307	(4791	5516)	4345	2638	6983
水元村	2823	(1387	1436)	3647	(1826	1821)	4030	(2025	2005)	824	383	1270
新宿町	2401	(1244	1157)	3638	(1868	1770)	4848	(2472	2376)	1239	1210	2447
奥戸町	5459	(2752	2707)	7537	(3866	3671)	11365	(5841	5524)	2078	3824	5906
本田町	5875	(3084	2791)	13156	(6902	6254)	27390	(14119	13271)	728	14234	21515
亀青村	3142	(1683	1459)	4526	(2314	2212)	6159	(3137	3022)	1384	1639	3017
南綾瀬町	4637	(2984	1653)	9242	(5327	3915)	20357	(11099	9258)	4605	11115	15720
(小計)	27661	(14803	12858)	49415	(25657	23758)	84456	(43484	40972)	21784	35041	56795
吾嬭町	30660	(14269	16391)	59921	(30156	29765)	80976	(41794	39182)	29261	21055	50316
隅田町	14607	(6312	8295)	21240	(10038	11202)	25077	(12222	12855)	6631	3837	10470
寺島町	19159	(10108	9051)	39251	(20620	18631)	49457	(25576	23881)	20029	10206	30298
(小計)	64426	(30689	33737)	120412	(60814	59598)	155510	(79592	75918)	55986	35098	91084
亀戸町	38548	(19016	19532)	57321	(27234	30087)	65171	(32429	32742)	18671	7850	26623
大島町	22333	(11893	10440)	35420	(18877	16543)	43139	(23254	19885)	13087	7719	20806
砂 町	12184	(6589	5595)	20346	(11123	9223)	34661	(18452	16209)	8162	14315	22477
(小計)	73065	(37498	35567)	113087	(57234	55853)	142971	(74135	68836)	40022	29884	69906
合 計	204531	(103253	101278)	347444	(177052	170392)	479908	(247144	232764)	142913	132464	275377
右 岸	145510	(72472	73038)	257634	(130823	126811)	338408	(174416	163992)	112124	80774	192898
左 岸	59021	(29784	28240)	89810	(46299	43581)	141500	(72728	69072)	33789	51690	82479

註 1) 各町村「現状調査」の「人口」より作成。
 2) 人口の()内は男女内訳である。
 3) 人口増加数欄の20/25は1920年から25年の間、5/30は1925年から30年の間、20/30は1925年から30年の間の増加数。

第6表 人口密度・人口指数

	人口密度			人口指数			人口増加率		
	1920	1925	1930	1920	1925	1930	1920/25	1925/30	1920/30
小松川町	62	187	301	100	301	498	201.0	39.6	397.9
松江町	28	40	63	100	144	224	43.8	55.6	123.8
葛西村	23	25	27	100	112	121	11.9	8.4	21.3
瑞江村	27	32	36	100	121	136	20.8	12.9	36.3
鹿本村	24	25	31	100	106	129	5.6	22.2	29.1
篠崎村	17	23	24	100	133	142	32.9	7.1	42.5
小岩町	27	42	91	100	155	334	55.1	133.7	234.2
(小計)	28.6	46.8	70.4	100	163.9	246.3	63.9	50.3	146.3
金町	24	56	75	100	231	310	130.7	34.4	210.1
水元村	16	20	23	100	129	143	29.2	10.5	42.8
新宿町	30	46	61	100	152	202	51.5	33.2	101.9
奥戸町	21	29	43	100	138	208	28.1	50.1	108.2
本田町	39	87	181	100	224	466	123.9	108.2	366.2
亀青村	26	37	50	100	144	196	44.0	36.2	96.0
南綾瀬町	31	62	135	100	200	439	99.3	120.3	339.0
(小計)	25.6	45.7	78.0	100	178.6	305.3	78.6	70.9	205.3
吾嬬町	258	504	681	100	195	264	95.4	35.1	164.1
隅田町	272	397	468	100	146	172	45.4	18.6	71.7
寺島町	302	623	785	100	205	258	104.9	26.0	158.1
(小計)	167.2	273.9	411.7	100	186.9	241.4	86.9	29.1	141.4
亀戸町	495	736	837	100	138	169	48.6	13.4	69.1
大島町	326	517	629	100	159	193	58.6	21.8	93.2
砂町	75	126	215	100	167	284	54.8	70.4	100.6
(小計)	245.0	379.2	479.3	100	154.8	195.7	54.8	26.4	95.8
合計	68.3	116.0	160.3	100	170.0	234.6	68.9	30.1	134.6
右岸	219.5	388.7	570.5	100	177.1	232.6	77.1	31.4	132.6
左岸	25.3	38.5	60.7	100	152.2	239.7	52.2	57.6	139.7

註 1) 各町村「現状調査」の「人口」「人口密度」より作成。

これに対して、向島地区・城東地区の諸町は、人口増加率は吾嬬町が164.1%、寺島町が158.1%で全町村平均134.6%を超えるが、その他は砂町100.6%、大島町93.2%、隅田町71.7%、亀戸町69.1%というように小さい。人口もそれぞれ2.6倍、2.6倍、2.8倍、1.9倍、1.7倍、1.7倍の増加で全町村平均の2.3倍をやや上回る、あるいは達しない。しかし、これらの諸町の増加人口そのものは吾嬬町が5万0316人で最大であるほか、寺島町3万0298人、亀戸町2万6623人、砂町2万2477人、大島町2万0806人、隅田町1万0470人というように大きいのである。

この人口増加の要因について記述をみよう。

吾嬬町(この10年間に約2.6倍の激増、人口8万を超え、南葛第一)

之ガ理由ヲ考察スルニ東京市人口ノ郊外流出ヲ以テ主要ナル理由トナスト雖モ、更ニ本町ノ地勢、位置等工業地区ニ適セルヲ以テ最近十ヶ年間ニ工

業界ノ驚嘆スベキ発展・隆盛ヲ見タルコトモ亦人口増加ノ理由ノ大ナルモノナリ。之ヲ要スルニ本町ハ直接東京市ト境セルガ故ニ人口郊外流出ノ影響最モ多ク受ケ、加フル大小工場ノ設立ニ伴フ人口ノ集中ニ依リテ斯クノ如キ人口増加ヲ将来セルモノト言フベシ。

隅田町(この間約7割弱の増加)

之カ増加理由トスル所ハ震災後隣接諸町村発展ノ一般的理由ニ依レハ勿論ニシテ加フルニ本町工業ノ隆盛ニ基ケルモノト云フベシ。昭和三年及昭和四年ノ公簿人口トヨリ昭和五年ノ国勢調査ニ於テ却ツテ減少ノ傾向ヲ示セルハ、公簿人口ト国勢調査人口ノ誤差ニ依ルト雖モ、近来財界不況ニ因ル各工場会社ノ事業縮小及閉鎖等ニ基クモノト思惟セラル。本町ハ将来工業ノ隆盛、施設ノ完備如何ニヨリテハ尚相当ノ人口増加ヲ来スベキ余地アルトス。現在ノ人口密度ハ面積一万坪ニ付キ四六八人ニシテ東京市赤坂区ノ四四八人ヲ凌駕セリ。

寺島町(この10年間に約2倍半に達する激増)

之ガ理由ヲ考察スルニ震災後東京市人口ノ郊外流出ノ一般的理由ニ基クモノトナスト雖モ、特ニ本町ニ於ケル特殊的理由ヲ挙グレバ次ノ如シ。(イ)東武鉄道、京成電車等ノ交通機関ノ完備セルコト、(ロ)水運ノ便ニ富ミ工業地区トシテノ隆盛ヲ来シタルコト、(ハ)指定地ニヨル影響。

亀戸町(この間約7割弱の増加)

此ノ増加率ハ隣接諸町村ニ比スルニ高率ノモノト言フヲ得ス。是レ本町ガ比較的早くヨリ發展セルヲ以テ既ニ人口ノ包摂能力ヲ剩サザリシニ依ルモノト言フベク、現在ニ於ケル密度八三六人(面積一万坪ニツキ)ハ既ニ飽和状態ニアルモノト謂フベシ。前記十ヶ年間ニ於ケル七割ノ増加ハ都市人口ノ郊外流出、工業地区ノ興隆、花柳界ノ發展等ニ起因スルハ謂フマデモナシ。

大島町(この10年間に約9割の増加)

是レモトヨリ東京市人口ノ郊外流出ニ起因スルハ勿論ナルモ、殊ニ昭和三年ニオケル急激ナル増加ト昭和四年ノ減少ヲ見タル理由ハ東京市内居住者ノ区画整理ニヨリ一時的転住ヲナシタル為ニシテ減少ハ其復帰ニ伴ヒテ生ジタルモノナリ。

砂町(この10年間に約3倍の激増)

之ガ理由トスル所ハ既ニ町勢現況ノ項ニ述ベタル町勢發展ノ理由ト一致スルモノナリ。現在ノ人口密度ハ面積一万坪ニツキ二五人ニシテ尚相当ノ人口増加ノ余地ヲ剩スモノナリ。

小松川町(1930年は20年の実に5倍に達する急激なる増加)

蓋シ之ガ理由トスル所ハ震災ニ因ル人口ノ郊外流出ニ依ルモノニシテ、最近ニ至リ本町ガ工業地区トシテ急激ナル發展ヲ見タルモ亦一理由タルヲ失ハズ。

本田町(この10年間に約4倍半に達する増加)

今ガ理由ヲ考察スルニ、本町ハ水運ニ恵マレタル地ニシテ工業地域トシテ好適セルヲ以テ大小工場ノ設立セラル、ト共ニ人口ノ増加ヲ招来セシコト、又一方ニ京成電車ノ便ニ当リ近時住宅地トシテ著シキ發展ヲナシタルコト等ニシテ、従来ノ主要産業タル農業ハ漸次其地域ヲセバメ現在ニ於テハ本町

ノ東南部大字淡ノ須附近ニ僅ニ片影ヲ止ムル現状ナリ。現時ニ於ケル本町人口密度ハ面積一万坪ニ付キ四六六人ニシテ隣接吾嬬町ノ六六一人ニ比スルモ尚相当ノ抱擁能力ヲ剩スモノニシテ、最近開通セル京成電車日暮里線ハ益々本町ノ交通ノ便ヲ加フルヲ以テ将来尚相当ノ人口増加ヲ予想シ得ル。

南綾瀬町(この10年間に約4.4倍に達する激増)

之ガ理由トスル所ハ震災後ニ於ケル東京市人口ノ郊外流出ノ一般的理由ニ依ルモノト雖モ、本町トシテ特殊的理由ヲ考察スルニ、(イ)比較的都心ニ近キ地域ニアルコト、(ロ)最近交通機関ノ整備セルコト、(ハ)本町ノ地勢住宅地域ニ適スルコト、等ヲ以テ主ナルモノト謂フベシ。既ニ述ベタル如ク青砥ヨリ分岐シテ本町ノ南半ヲ貫通シテ日暮里ニ至ル京成電車ノ開通ニヨリ本町ハ将来益々人口ノ増加ヲ来スコトヲ予想シ得。

小岩町(同上10年間に約3倍という驚嘆すべき増加率)

而シテ之ガ原因トスル所ハ既ニ述ベタル如ク、総武線・京成電車等ノ交通機関ノ至便ナルヲ以テ第一ノ理由トスベク、加フルニ本町ノ地勢・風致等ガ住宅地トシテ好条件ヲ具備セルニヨルモノト謂フベシ。

奥戸町(この10年間に約2倍強に達する増加)

今之ガ理由ヲ考察スルニ、一ツハ震災後急速ナル發展ヲ示セル郊外諸町村ノ人口増加理由ト共通ナルモノト言フコトヲ得ベキモ、本町ニ於ケル特殊的理由ヲ挙グレバ近年交通機関ノ發展ヲ見タルコトニシテ、即チ最近開発セラレタル新小岩駅ハ附近ノ地ヲ忽チ住宅地化セシメツ、ハアリ。京成電車ノ利便モ亦本町ノ發展ヲ助成スル所大ナルモノアリ。更ニ荒川放水路流域に於ケル大小工場ノ設置モ本町ノ人口ノ増加ヲ将来セル重要ナル一理由タルヲ失ハザルベシ。

金町(同上10年間に約3倍の増加)

是震災後東京市人口ノ郊外流出ノ一般的理由ニ依ルモノト雖モ特ニ本町ハ全町ニワタリ樹木ニ恵マレ且交通機関ノ完備セルモアリテ住宅地トシテ好適セル結果ニ依ルモノト謂フベシ。尚最近本町ニ大小工場ノ設立ト共ニ漸次工業地トシテ發展シ

東京市域拡張期における南葛飾郡町村の状況（神立春樹）

ツ、アルコトモ人口増加ノ主要ナル理由ノト見ルコトヲ得。

松江町(同上10年間に約2.3倍)

而シテ本町ノ人口増加率ヲ累年のニ考察スルニ、他町村ノ如ク震災或ハ交通機関ノ開通ニヨツテ著シキ影響ヲ受ケタルヲ見ズ。即チ町内ヲ走ル城東電車ノ開通ハ大正十四年末ニシテ之ニ依リテ本町ノ交通ハ利便ヲ加ヘタリト雖モ、同電車ヲ利用シテ都心ニ至ルニハ荒川放水路ニ阻マレテ乗合自動車ノ連絡ヲ俟タザルベカラズ、又其ノ他ノ交通機関モ同様ナル煩瑣ヲ感ゼシムルハ、蓋シ町ノ発展ヲ遅々タラシムル原因ノ一ナルベシ。然ルニ近年ニ至リテ東京市人口ノ流出ハ隣接スル小松川町・大島町・亀戸町ノ人口膨脹トナリ、本町モ其ノ余波ヲ受ケ従来耕地タリシ沿線ノ地ハ漸次住宅地化シ人口ノ稠密ヲ来シツ、アリ。

新宿町(この10年間に約2倍強に達する増加)

是レーツニ震災後東京市人口郊外流出ノ一般的理由ニ依ルモノニシテ、他ニ何等ノ特殊的理由ヲ発見セズ。

葛西村(同上約二千人の増加)

之カ増加ヲ見タル理由ヲ考察スルニ、元來本村ハ交通ノ便頗ル悪シク隣接町村トノ交通ハ僅ニ舟運ノ便ト乗合自動車ニヨルノミニシテ他町村ノ如ク東京市ノ膨脹ニ伴ヒタル人口ノ流出ニ影響ヲ受タルモノニ非ズ。純然タル自然ノ増加ニ依ルモノト謂フベシ。

瑞江村(同上10年間3割3分の増加に過ぎない)

是本村ノ地勢卑湿ナル低地ヲナセルト、加フルニ交通ノ便ニ乏シカリシ結果ニヨルモノニシテ、大正十四年十二月村内城東電車ノ開通ヲ見タルモ其ノ影響ハ未ダ極メテ輕微ナリ。十年間ニ三割三分ノ増加ハ自然増加ノ域ヲ脱セザルモノト言フベシ。

鹿本村(同上10年間に僅かに3割に満たない増加に過ぎない)

是レ震災後急激ナル人口増加ヲ示セル隣接諸町村ニ比スレバ極メテ低率ナルモノナリ。本村ノ人口増加理由トシテ単ニ自然増加ニ依ルモノニシテ他ニ何等ノ理由ヲ見出し得ザルベシ。

篠崎村(同上約千人の増加)

之ガ増加ノ理由ヲ考察スルニ、元來本村ハ交通ノ便ニ恵マレズ、交通機関トシテハ僅カニ舟運ト乗合自動車ヲ有スルニ過ギズ。従テ他町村ノ如ク東京市人口ノ郊外流出ニ影響ヲ受ケタルモノニ非ズシテ、純然タル自然増加ニ依ルモノト謂フベシ。

亀青村(この間に約10割の増加)

該数字ニヨリ見ルモ其ノ増加ハ急激ナリシモノニアラズ。従來本村ハ交通機関ノ便ニ欠ケタル感アリテ他町村ニ見ル如ク東京市人口ノ郊外流出ノ影響ヲ受ケル事勤ク概シテ自然増加ノ結果ト云フベシ。然レドモ今後交通機関ノ完備並ニ市郡合併計画アラシカ好適ナル住宅地トシテ人口ノ増加スルヲ予想シ得ルモノナリ。

水元村(この間に約4割の増加)

他ノ隣接諸町村ニ比シテ著シク低率ト云フベシ。是、本村ガ交通機関不備ニシテ村ノ発展ヲ助長スルモノナキニ基クモノニシテ、蓋シ以上ノ増加ハ自然増加ニヨルモノト云フヲ得ベシ。

7 保健衛生、上下水道

保健衛生問題ノ最大ノ課題ハ伝染病問題である。各町村ハ伝染病予防措置トシテ、定期種痘、腸チブス予防注射、清潔方法、捕蝇、防疾知識ノ啓発を実施スル。全町村ガ南葛飾病院町村組合ニ加入シ、伝染病患者ハ南葛飾病院ニ送院シ、治療スル。同病院ハ小松川町にある。各町村ハ組合負担金を負担スル。

住民ノ医療ハ各町村ノ医療施設ガ当たるであらう。ここには医師・歯科医師・薬剤師・産婆・獣医師ノ数が記載されているガ、町村により大きく異なる。

篠崎村ガ「南葛飾郡二十ヶ町村中唯一開業医師ナキ村ナリ。本村ニハ開業歯科医師モナシ」ノ無医村であるほか、鹿本村、水元村ハ医師ハ1であるガ歯科医師ガいない。医師1ハ、この鹿本村、水元村ノ他瑞江村、新宿町、医師2ハ葛西村、医師3人は亀青村で、葛飾地区、江戸川地区ノ町村ニ多い。これらノ町村では、医師1人当リ住民数は瑞江村7036人、葛西村4663人、新宿町4848人、水元村4030人、鹿本村3767人

などと大きい。この地区では小松川町は医師数が大きい、南葛飾病院所在地であるが、また荒川右岸都市化地域における開業医開業によることも加わるであろう。

これに対して、寺島町49人、亀戸町45人、吾嬭町24人、隅田町20人などと向島・城東区域は医師数は多く、歯科医師も然りである。医師1人当り住民数もそれぞれ1009人、1448人、3374人、1254人で吾嬭町がかなり大きいことを除いて少ない。この地区には、吾嬭無料診療所・済生会東京府吾嬭診療所(吾嬭町)、済生会東京府寺島診療所(寺島町)、東京府社会事業協会附属亀戸病院・加命堂脳病院(亀戸町)、済生会東京府大島診療所(大島町)、済生会砂町診療所(砂町)もあり、医療機関はそれなりである。

保健衛生上で大事な汚物処理であるが、江戸川・葛飾地区の町村は、警視庁令汚物掃除法準用町村指定を受けたが、まだ日が浅く、該施設にみるべきものがない。巡視2、常備人夫12にて塵芥収集処分を実施しているという小松川町を除いて他の町村が「汚物掃除施設ナシ」となっている。これに対して向島・城東地区は、汚物掃除施設 汚泥処理：毎月1回定期下水デー、塵芥処理：請負制度搬出戸数17,900戸、糞尿処理：町民と一般業者の任意契約(吾嬭町)、汚物掃除施設 従業人員9、他に鐘淵紡績株式会社単独事業(隅田町)、汚物掃除施設 塵芥処理：町直営 搬出戸数11,764戸、汚泥処理：毎月1回(夏季6～9月は2回)管内一斉(寺島町)、汚物掃除施設 塵埃処理：町直営 常行傭人夫14臨時平均1人、塵芥搬出戸数13,900戸(亀戸町)、汚物掃除施設 塵埃処理：町直営、汚泥処理：公私下水浚渫 常人夫4人(大島町)、汚物掃除施設 汚物掃除事業：請負制度 多くは町内会において請け負う(砂町)、と汚物処理事業を実施している。警視庁令に基づく汚物処理事業は荒川右岸の地域で実施されていて、左岸地域の町村には実施されていないのである。

上水道は、江戸川・葛飾地区は小松川町と、町・町村組合経営なし、組合・個人経営簡易水

道施設14、水源総て鑿井、各200～300戸給水、という松江町の他は「上水道事業 ナシ」である。給水は井戸によったであろう。これに対して、向島・城東地区の諸町と小松川町は江戸川上水町村組合に加入し、上水道給水地域となっている。いずれの町も水道栓使用人口は現住人口の66.3%(吾嬭町)～78.0%(亀戸町)、小松川町は67.8%で水道栓使用外が相当数いて、井戸水によっているであろう。使用栓使用戸数の内の共同栓使用戸数は57.5%(亀戸町)～77.6%(隅田町)、小松川町は62.1%で多くは個別家庭水道栓ではない。

このように、荒川放水路右岸地域は上水道給水となっているが、左岸地域は上水道は全くなく、井戸水である。

下水道は、江戸川・葛飾地区は総てが「下水道事業ナシ」で、向島・城東地区は砂町「下水道事業ナシ」、それ以外は総て「下水道事業 暗渠下水道施設ナシ」となっている。なお、この砂町以外には排水事業排水場が設けられていることが記載されている。

8 教育・文化施設

各町村に小学校がある。それは、尋常小学校と高等尋常小学校で、分教場を含め36校、1校平均21.2教室、23.2学級、児童数1238.6人である。建物は木造2階建がほとんどで、鉄筋コンクリート2階建が2校である。

1校平均をみると、江戸地区15.6教室、14.8学級、764人、葛飾地区15.8教室、19.3学級、1017.6人、向島地区29.9教室、35学級、1938.3人、城東地区27.3教室、29.5学級、1647.9人であり、さらに右岸地域は、29.5教室、32.7学級、1786.3人、左岸地域は13.5教室、14.2学級、754.8人である。東京市に隣接、ないし隅田川をもって対面する地域、さらには、荒川放水路右岸地域は、学校数は多く、その規模は大きい。

注目すべきは、2部授業が多いことである。全体では1万9717人の児童が2部授業であるが、これは全児童の34.6%である。これを地区別に

みると、江戸川地区32.5%、葛飾地区33.7%、向島地区41.0%、城東地区29.8%で、さらに荒川放水路右岸地域は37.7%、左岸地域は27.6%となる。人口稠密地域においてそれは大きい。町村別にみると、向島・城東区の多くの町とともに、本田町、小松川町、南綾瀬町などが大きい、それらは人口増加率がことに高い町である。急速な人口増加、児童増加がこのような2部授業を展開させているのである。

このように教室・施設不足にもかかわらず、多くの町村では新設・増築計画はないという。「本町ハ近来就学児童ノ増加ニ伴ヒ一校ノ新設ヲ必要トスル情勢ニアリ。即チ昭和六年ニ於ケル本町ニ部教授学級ハ三〇学級ニ及ビ尋常科第二学年マデノ全部ニ部教授ヲ施行シツ、アリ。昭和七年ニ於テハ更ニ第三学年マテ之ガ実施ヲナスヘキ趨勢ニアルモノニシテ此ノ際、新小学校ノ建設ハ最モ緊急ヲ要スルモノト謂フベシ。然ルニ町経済ノ比較的富裕ナラザル本町ハ其ノ財源ノ捻出ニ支障ヲ生ジタルヲ以テ小学校新設ハ単ニ計画ニ止マリテ未ダ具体的運ビニ至ラザルモノナリ」(大島町)と記す。急増する児童数に対する小学校施設・設備の立ち遅れが2部授業に象徴的に示される。

小学校のほか、すべての各町村に実業補習学校がある。松江町3校、奥戸町・亀戸町・大島町に各2校の他は各1校で、農業、工業、商業、裁縫・家事裁縫などである。この他にすべての町村に青年訓練所がある。第一から第三の尋常夜学校(吾嬬町：学級数18・教員数12・生徒数105内男78)：隅田尋常夜学校(学級数2, 教室6, 生徒数62内男45), 第一・第二亀戸, 香取夜学校(亀戸町：学級数4, 教員数11・生徒数256内男206)がある。幼稚園は亀戸町：私立亀戸幼稚園, 金町：金町幼稚園, 隅田町：私立鐘淵幼稚園の3園に過ぎない。

中等学校は、府立第七中学校(向島町), 府立第七高等女学校(小松川町)の2府立学校, そして東京第七中学校夜学校(向島町)がある。その他は、小岩町：城東高等家政女学校, 隅田町：私

立鐘淵実科女学校, 寺島町：私立向島高等女学校, 私立寺島女子商業学校, 亀戸町：私立東京工匠学校, などである。荒川放水路左岸区域は家政女学校1校のみで、あとは右岸地域であるが、これとてもその数は少ない。あまつさえ、専門学校・大学という高等教育機関はこの南葛飾郡、やがて四つの市区となるここに1校もない。中等教育学校が発達せず、高等教育機関は皆無である。

図書館は、寺島町立図書館(寺島町)で、1929(昭和4)年4月設立認可、6月開館。府立第七中学校校友会の協力が大きい。同会からの2370部などにより約3000部所蔵、1930年中の閲覧者数3万0256人(延べ)である。図書館利用希望者は他町村でも多いであろうに南葛飾郡にこのみである。

このように郡全体として教育・文化施設の立ち遅れは著しいといえよう。

9 各町村現況の記述

この資料の町・村勢現況欄は、各町村の状況を記している。それを地区ごとに掲載する。

江戸川地区

小松川町

小松川町ハ南葛飾郡ノ中部ニ位置シ、曾テ郡制ノ存セシ時代ニ在リテハ郡役所ノ所在地トシテ郡ノ中心ヲナセリ。サレバ郡制ノ廃止ヲ見タル今日ニ於テモ官公衙等ノ存在スルモノ勘ナカラズ。東京区裁判所小松川出張所, 東京府南葛飾郡税務出張所, 東京府小松川土木出張所, 小松川警察署, 府立第七高等女学校, 南葛飾病院等其ノ主要ナルモノナリ。

周囲河川ヲ以テ圍繞セラル、本町ハ水運ノ便開ケ、加フルニ総武線平井駅ノ存在ハ房総方面ヘノ出荷ニ便セルヲ以テ、工業地区トシテ最適ノ条件ヲ具備セル為メ早クヨリ大工場ノ設立セラル、モノ多ク、震災後ハ特ニ其ノ数ヲ増加シ昭和五年ニ於テハ六六ノ工場ヲ有ス。其ノ内常時五人以上ノ職工ヲ使用スル工場ニテモ四五ヲ数フ。各種工業中就中化学工業最モ発達シ食品工業之ニ亜グ。

工場ノ主要ナルモノヲ挙グレバ、大成化学工業

株式会社工場、日東硫肥工場、大阪鉄板製造所、中央製糖工場、大日本人造肥料工場、日本製煉工場等殆んど枚挙ニ暇ナシ。

町ノ施設トシテハ概シテ見ルベキモノナシト雖モ、水道ハ江戸川上水町村組合ノ給水ヲ受ケ給水区域ハ全町ニ及ビ、町営住宅ヲ有シ、最近職業紹介所ノ設置ヲ見ル等都市的施設ノ完備ニ努メツ、ハアリ。

松江町 記述なし

葛西村

本村ハ東京府ノ東南端ニアリ、東ニ江戸川、西ニ荒川放水路アリテ、南ニ東京湾ヲヒカヘタル地ナリ。従テ本村ハ漁業ニ従事スルモノ頗ル多ク人口ノ約六割ヲ占ム。

本村ハ四囲河海ニ圍繞セラレ水運ノ便ニ恵マルト雖モ未ダ陸上ノ交通ニ恵マレズ、以テ商工業ノ発展ヲ助クルナシ。本町ノ人口ガ隣接町村ノ増加ニ比シ極メテ微々タル増加率ヲ示シ、未ダ一漁村ノ域ヲ脱セザル、蓋シ交通上ノ不便ニ依ルト言フベシ。

瑞江村

本村ハ都心ヨリノ隔離甚ダ遠ク、加フルニ交通機関ノ便少ナク、従来ノ発展ハ極メテ遅々タルヲ免レザリキ。サレバ今日尚農業ヲ主要産業トスル一農村ノ域ヲ脱セズ、村ノ施設モ亦見ルベキモノナシ。

然レドモ最近ニ至リ城東電車ノ開通セルモアリテ漸次人口ノ増加ヲ来シ、村勢発展ノ道ヲ辿リツ、ハアリ。

鹿本村

本村ハ現住人口ノ大半ハ農業ニ従事セルモノニシテ未ダ純農村ノ域ヲ脱セズ

千葉街道ハ本村ノ中央部ヲ貫通シ往昔ニアリテハ交通上極メテ利便ナル地ナリシカモ、現在ニアリテハ交通機関ノ完備セルモノナリ。為ニ村勢ノ発展遅々タル現状ヲ示セリ。

村ノ施設ハ概シテ見ルベキモノナシト雖モ村經濟ハ極メテ富裕ナルモノノ如シ。

本村ノ交通機関ハ前述ノ如ク極メテ不便ニシテ、中南部ニアリテハ千葉街道ニ沿ヒテ運転セル乗合自動車ノ便アルノミ。北部ニ於テハ総武線村ノ北端ヲ横リ、村内ニ停車場無キモ、小岩駅、新小岩駅ノ利便ヲ受ケテ近來住宅地漸次加フルニ至レリ。総武

線ノ電化計画完成セバ、或ハ同地方ノ發展括目ニ価スルアルベシ。

本村ハ大半農家ニシテ今日迄來リタルモ、近時道路幅員六間ノモノ村内貫通ヲ計劃サレ目下其ノエヲ急キツツアリ。完成ノ曉ハ交通ノ便ヲ得ルニ從ヒ住宅地トシテ多少囑望セラレル程度ノモノアリ。

篠崎村

本村ハ東京都市計画区域ノ最東部ニ位シ江戸川ニ面シ、西境ハ鹿本村及瑞江村ニ接ス。斯クノ如ク本村ハ遥ニ都心ヨリ遠ザカレルヲ以テ村勢發達ハ遅々トシテ振ハズ、交通機関ノ如キモ舟運ノ便ト乗合自動車ニ依ルノミナリ。従テ本村ハ農業ニ従事スルモノ多ク人口ノ約七割ヲ占ム。即チ南葛飾郡ノ一農村ニ過ギス。

小岩町

本町ハ従來東京府ノ最東端ニ位スル一農村ニシテ、住民ハスヘテ農ヲ以テ生業トナス一寒村ニ過ギザリキ。

然ルニ最近ニ至リ南葛方面ニ於ケル好個ノ住宅地トシテ急速ナル發展ヲナセルモノニシテ、現在ノ居住者ノ過半ハ智識階級ニ属スル俸給生活者ナリ。

大正九年ノ国勢調査ニ於ケル四、四〇〇ノ人口ハ昭和五年ノ国勢調査ニ於テハ一五、〇〇〇人に垂ントスル激増ヲ示セリ。斯クノ如ク本町ガ住宅地トシテ好適セルノ理由ハ、一ツニ京成電車及総武線ニヨル交通機関ノ便宜ト、江戸川ノ清流ニ臨ミテ勝景ニ富メルニヨルモノト謂フベシ。

人口増加ニ伴ヒ町經濟ノ膨脹ハ必然的ノ趨勢ニシテ、教育、土木、衛生、社会事業等ノ町施設モ亦極メテ多端ナル情勢ニアリ。

現在工事中ニ属スル両国・秋葉原間ノ省線ノ連絡ナリテ総武線ノ電化ヲ見タル曉ハ、本町ノ交通ハ益々其ノ便ヲ加へ、城東ニ於ケル最モ好個ナル住宅地トシテ中央沿線ノ杉並町、井荻町等ニモ匹適スベキ急速ナル發展ト住宅地化ヲナスモノト見ルヲ得ベシ。

葛飾地区

金町

本町ハ東ハ江戸川ニ臨ミテ水運ノ便ニ富ムト共ニ陸上ノ交通モ総武本線及京成電車金町線ノ通ズ

ルアリテ、郊外町村トシテ水陸共ニ交通機関ノ便ニ恵マル。サレバ最近ニ於ケル町ノ發展ハ極メテ急速ニシテ、大正九年ノ国勢調査ヨリ昭和五年ノ国勢調査ニ至ル十ヶ年間ニ約三倍ニ達スル人口増加ヲ致セリ。

本町ハ元来農業ヲ以テ主要産業トナセシモ、近来大小工場ノ設立セラルハモノアリテ町ノ西南部ハ漸次工業地化シツ、アリ。東北部ニアリテハ交通ノ便ノ開クルト共ニ住宅地化スルノ傾向ヲ示セリ。

町ノ施設ハ概シテ見ルヘキモノナシト謂モ町財政ハ極メテ富裕ナリ。

町内江戸川上水道町村組合ノ取水場及浄水場アリ。大字柴又ニ所在スル題經寺ハ俗ニ柴又ノ帝釈天ト称シ、世人ノ信仰厚ク四時参詣者絶ユル時ナシ。

水元村

位置ニ於テ全ク都心ヲ遠サカレル水元村ハ交通機関不備ニシテ村ノ發展ヲ助長スルモノナク、隣接諸町村ノ急速ナル發展ニ取り残サレタル觀アリ。本村ノ交通機関トシテハ隣接セル金町ニ通ズル京成電車ヲ利用スルニ止マリ、村内ヲ通過スル交通機関全クナシ。而シテ村ノ中央部一帯ハ田畑ニシテ、家屋ハ其ノ周囲ヲ馬蹄形ニ包围シ、未ダ全ク農村ノ域ヲ脱セザル情勢ニアリ。

本村ノ如ク全ク都心ヲ隔リタル地域ハ交通機関ノ完備スルニ非ザレバ、今後ノ發展遅々タルヲ免レザルベシ。村ノ事業施設モ亦概シテ見ルベキモノナシ。

新宿町

水戸街道ハ本町ノ中央ヲ東西ニ縦貫シ往時ハ新宿ハ宿場ノトシテ交通上ノ要衝ニ当リ繁栄セシ地ナリ。

現時ニ在リテハ常磐線町ノ北部ヲ通過スルト雖モ本町内ニ停車場ヲ有セズ、京成電車本線モ亦本町ノ南境ニ並行シ、高砂ニ分岐セル同電車金町線ハ本町ノ東境界ニ並行シテ北上セルモ、何レモ本町内ニ停留所ナシ。

即チ往時ノ交通上ノ要地モ現在ニ於テハ交通機関ノ便ニ恵マレザルノ現状ニアリト謂ハザルベカラズ。依ツテ町ノ發展モ亦之ガ為メニ遅々タルヲ免レズ。

大正九年ノ国勢調査ニ於テハ二、四〇一ノ人口ヲ有セル本町ハ昭和五年ノ国勢調査ニ於テハ四、八四八ヲ数フ。此ノ増加ハ約二倍ニ達スルモノト謂モ隣接金町ノ三倍ニ達セルニ比スレバ尚大ナリト言フベカラズ。

水戸街道ニ沿フ地域ハ町並続キテ商家軒ヲ並ベタレドモ、他ノ地域ハスベテ水田、畑地ニシテ、主要産業ハ尚農業ニシテ未ダニ農村ノ域ヲ脱セズ。

町ノ北部交通機関ノ便ナル地ニ二三ノ工場アリ。西方ヲ境ス中川舟運ノ便アリテ将来工場地トシテノ發展ヲ囑望スルニ足ルベシ。

奥戸町

農業ハ本町ノ主要産業ニシテ耕地面積ハ全町ノ半ヲ占メ、用水ノ便ト相俟ツテ其生産額工業ト対比セリ。

工業ハ本町ノ南部荒川放水路流域ニ盛ニシテ諸種ノ大小工場アリテ其ノ産額ハ本町生産物ノ首位ヲ占ム。

特筆スベキハ本町交通機関ノ利便ニシテ、総武線ハ町内ニ新小岩駅ヲ開設シ、京成電車モ亦本町ノ北部ヲ貫キテ高砂駅ヲ有シ、市内及千葉県方面ヘノ交通ハ極メテ便ヲ加フルニ至レリ。斯ノ如ク交通機関ノ完備ハ前記新小岩駅、高砂駅附近ノ区域ヲ漸次住宅地化シツ、アリアルモノニシテ、将来益々急速ナル發展ヲ予想シ得ベシ。

本町ハ最近ニ至リテ町制ヲ施行セルモノニシテ、町トシテノ都市的施設概シテ見ルベキモノナシ。

要スルニ本町々勢ハ従来ノ主要産業タル農業ハ漸次衰退ノ機運ニ向ヒ、今後交通運輸ノ利便ト相俟チテ住宅地又ハ工業地トシテ相当ノ發展ヲ見ルモノト信セラル。

本田町

荒川放水路ノ開鑿セラルルニ及ビ本町ハ此ノ地理的境界ニ依リテ市内方面トノ間ニ距リヲ生ジ、之ガ為メ本町ノ發展ヲ阻止セラレタル憾ナシトセズ。即チ南葛飾郡ハ荒川放水路ニ依リテ分セラレ、其ノ西部ハ比較的急速ニ都市化セルニ反シ、放水路以東ノ發展ハ極メテ遅々タルモノナリ。例ヘバ江戸川上水ノ如キモ本町ノ現状ヲ以テスレバ之ガ給水ヲ必要トスルヤ勿論ナリ、放水路以東ナルノ故ヲ以テ其

ノ施設ヲ見ズ。

斯クノ如キ情勢ニアリト雖モ、荒川放水路以東ニ於テ最モ急速ナル發展膨脹ヲナセル町村ハ本町ヲ以テ第一トス。本町ガ斯クノ如キ發展ヲナセル理由ハ、蓋シ京成電車ニ依ル陸上交通ノ便ハ本町ノ一部ヲ住宅地化セシメ、荒川放水路及中川ニ依ル舟運ノ便ハ本町ノ一部ヲ工業地帯トナセル結末ニ依ルト謂フベシ。

即チ本町ハ曾ツテ純然タル一寒村ニシテ人口モ亦稀薄ナリシモ、最近十ヶ年間ニ人口ハ約五倍ニ達スル激増ヲ示シ、町經濟モ三倍ニ達スル膨脹ヲ示セリ。人口ノ膨脹極メテ急激ナルモノアリテ町ノ施設ハ之ニ伴ハズ、現在ニ於テハ挙グベキ重要施設ヲ見ズ。本町ノ将来多端ナリト云フベシ。

亀青村

本村ハ、全村面積ノ大部分ハ未ダ農耕ノ地ナレドモ、将来交通機關ノ便開クルニ至ラバ其ノ發展ハ甚ダシキモノアルベシ。即チ東京都市計画事業ノ完成セラレンカ幹線道路並ニ補助線道路ハ本村ヲ縦横ニ通ジ、更ニ青砥駅ヨリ分岐シテ本村ヲ通過スル京成電車日暮里線ノ上野乗入レノ實現、常磐線ノ電化等ニヨリ本村ノ交通機關ハ著シク其ノ便ヲ加ヘ、絶好ナル郊外住宅地トシテ發展ヲ見ルニ至ルベシ。

南綾瀬町

本町ハ従来江東ニ於ケル純然タル一農村ニシテ、大正九年ノ国勢調査ニヨレバ人口僅カニ五千人ニ滿タザル小村ナリキ。然ルニ比較的の都心ニ近キ理由ト最近ニ於ケル交通機關ノ完備トニヨリ急速ナル發展ヲ示セルモノニシテ、昭和五年ノ国勢調査ノ結果ハ人口二万ヲ突破シ其ノ増加率四・四倍（十ヶ年間）ニ達ス。

人口ノ激増ト共ニ町經濟モ急速ナル膨脹ヲ来タシ町ノ施設之ニ伴ハザルノ憾ナシトセザルモ、町ノ財政ハ比較的の富裕ナルモノ、如シ。

陸上ノ交通ト共ニ本町ハ荒川放水路及綾瀬川ニ依ル舟運ノ便ハ貨物ノ運輸ニ適セルヲ以テ工業ノ發展ヲ将来シ、最近ニ至リテ諸種ノ工場ノ設立セラル、モノ少ナシトセズ。然レドモ町ハ概シテ住宅地域ニ適セルヲ以テ昭和六年十二月開通セル京成電車日暮里線ノ便ト相俟ツテ将来住宅地トシテノ發

展ヲ予想シ得ベシ。

町内有名ナル堀切ノ菖蒲園アリ。

向島地区

吾嬬町

震災以前ニ於ケル本町ノ情勢ヲ見ルニ、全地域ノ多クハ卑湿ナル水田ノ占ムル所ニシテ、單ニ江東ニ於ケル一寒村ニ過ギザル状態ニアリシモノナリ。加之本町ノ地域ハ元、地盤極メテ低ク、水害ノ虞アリテ浸水ノ厄ニ遭遇スルコトモ屢々ナリヤ。

然レドモ本町ハ東京市ニ直接境セルガ故ニ、東京市ノ膨脹ニ伴ヒ其ノ影響ヲ受クルコト大ナルハ必然的ノ結果トシテ、漸次發展ノ経路ヲ辿レルモノニシテ、殊ニ大正十二年ノ関東大震災ニヨリ、本所深川方面ノ大小工場ノ城東方面ニ移転スルモノ続出シ、或ハ新工場ノ設立等相次イデ増加シ、十数年ヲ出ズシテ、大東京ニ於ケル工業地区ノ中心ヲナスニ至タレルモノナリ。

本町ガ工業地区トシテ斯クノ如キ隆盛ヲ致セシノ理由ハ、單ニ震災ニ依ル影響ノミト言フベカラズ。即チ本町ヲ繞ル河川ノ運輸ノ便ハ工業ノ發展ヲ来セン主要条件タリシモノノ如シ。

荒川放水路ノ開鑿ハ本町地域ノ水害ノ危虞ヲ除キテ、町勢發展ヲ助長シ今ヤ本町ノ人口ハ八万ヲ突破セル南葛第一ノ一大町トナレリ。

若シ之ヲ地方都市ニ比較センカ、宇都宮市、水戸市ニモ匹敵スベキ人口ヲ擁スル一大町ヲナセリ。然レドモ本町ハ所謂純然タル工業地区ニシテ独立都市トシテノ形態ヲ備フルモノニ非ズ。換言スレバ大東京ノ一細胞タル工業地区トシテノ存在ニシテ独立セル一都市トシテノ存在理由ナカルベシ。是レ東京市ニ接続セル隣接町村ノ全部ニツキ夫々言ヒ得ルコトナレドモ本町ニアリテ特ニ其ノ感ヲ深フスルモノナリ。隣接町村合併ノ必要ナル理由ヲ斯カル見地ヨリモ考フルコトヲ得ベシ。

南葛第一ノ人口ヲ擁スル本町モ最近經濟界ノ不況ニ依リテ、工場ノ閉鎖、事業縮少等ヲ生ジ町勢極メテ振ハザル結果ヲ来シ、從ツテ町財政モ亦甚シク逼迫ヲ告グルニ至レリ。是、純然タル工業地区ヲナス王子町、大島町等ニ於テモ齊シク逢着セル所ニシ

テ町政ノ将来多端ナルモノアリト謂フベシ。

急進ノ本町ハ現在ノ町施設ニツキテ見ルベキモノナシ。

隅田町

本町ハ南葛飾郡ノ西北部ニ位シ西方隅田川ニ接ス。

東武鉄道ハ町ノ中央部ヲ貫キ、隅田川ニ接スル区域ハ水運ニ恵マレ、交通運輸極メテ便ナリ。町ノ東部ハ人口最モ稠密ニシテ住宅地ヲナシ、町ノ西部ハ工業地域トシテ工業隆盛ヲ極メ、工場及会社ハ実ニ八十有三ヲ算ヘ、著名ナルモノニ鐘ヶ淵紡績、東洋車輛会社等アリ。

町ノ施設ニ関シテハ未ダ残サレタモノ少シトセズ、社会事業施設、下水道事業等ソノ一例ニシテ将来是等ノ施設ハ最モ緊急ヲ要スベキモノナルベシ。

寺島町

本町ハ東京市ニ直接境ヲ接セルヲ以テ比較的早くヨリ発展セル地ナリ。所謂古来ヨリノ俗称「向島」ノ中心ニ当リ、歴史的由緒名高キ墨堤ヲ有シ隅田川ニ臨ミ、城東ニ在リテハ吾嬭、亀戸町ニ並ギテ大ナル人口ヲ擁スル町ナリ。人口稠密ナル点ヨリ謂ヘバ亀戸町ノ面積一万坪ニツキ八三七人ニ並グ七八五人ノ密度ヲ示シ南葛飾郡第二位ニアリ。

東武鉄道、京成電車及市電等ニ依ル陸上交通機関ノ完備ト共ニ吾妻橋、千住大橋間ヲ通ズル乗合蒸気船ハ水上交通ノ便ヲ加ヘ、水陸相俟ツテ本町ノ発展ヲ助長セリ。更ニ隅田川ニ於ケル舟運ニヨル貨物輸送ノ便ハ本町ノ西部地域ニ工業ノ交流ヲ招来セルモノニシテ、大小工場ハ年ヲ逐フテ其ノ数ヲ増シ、江東ニ於ケル工業地区トシテ益々発展ノ経路ヲ辿ルモノト謂フベシ。

尚本町ノ東北部ニ於ケル所謂玉ノ井指定地ノ設定ハ本町ノ町勢発展ノ一原因ヲナスモノニシテ震災後ニ於ケル同地域ノ発展ハ実ニ驚異スベキモノアリ。

今ヤ本町ノ都市計画道路線ハ略々其ノ完成ヲ告グルニ至リ町ノ面目ヲ一新シ、下水道施設ハ江戸川上水町村組合ニ加入シ、町内隈ナク給水セラレ最近ノ事業ノ主ナルモノトシテ下水道改良工事ヲ興シ、職業紹介所ノ新設等ヲ見タリ。

教育機関トシテハ南葛地方唯一ノ府立中学校ノ所在スルモノアリ。町ノ教育施設ニツキテ見ルモ、鉄筋コンクリート建築ノ小学校、町立図書館ノ経営、尋常夜学校ノ設置等隣接町村稀ニ見ル施設ヲ有セリ。

斯クノ如ク町ノ施設ニハ比較的見ルベキモノアリト雖モ尚ホ都市的施設ノ残サレタルモノ少シトセズ。町経済モ亦富裕ナリト言フヲ得ザルベク、町ノ将来極メテ多端ナルモノアルベシ。

城東地区

亀戸町

本町ハ東京市ト直接境ヲ接シタル位置ニアルヲ以テ南葛飾郡中最モ早くヨリ発展セル地ナリ。現在ノ人口ハ六万五千ヲ算シ面積一万坪ニ対スル密度ハ八三七人ニ及ビ人口稠密ナル点ニ於テ南葛中第一位ナリ。

都市計画ニ依レハ全町工業地区ニ属シ昭和五年ノ現在ニ依ルモ大小ノ工場ハ二百有余ニ及ブ。就中、日清紡績、東洋モスリン、日本化学工業等其ノ大ナルモノナリ。

商業ハ十三間通り、天神橋通り等殷盛ヲ極メ老舗櫛比シテ市内ト何等異ル所ナシ。

本町陸上ノ交通ヲ見ルニ総武本線ハ本町ヲ横断シテ亀戸駅ヲ有シ、城東電車モ亦本町内ヲ貫通シ、市電ハ柳橋及錦糸堀ニ終点ヲ有シ極メテ至便ナル地位ニアリ、交通ノ便ナル点ハ城東ニ於ケル首位タルハ勿論隣接八十四ヶ町村ニツキテ見ルモ完備セル地ト言フヲ得ヘシ。

又水運ノ便ナルコト他町村ニ比ナク、河川運河ハ町ノ四囲ヲ繞リ舟運ノ便極メテヨシ。本町ノ工業地区トシテ発展セルノ因、蓋シ舟運ノ便ニ負フ所甚ダ多シ。

町ノ施設トシテハ概シテ見ルベキモノナシト雖モ町経済ハ極メテ富裕ニシテ、町債ノ比較的小ナルハ是ノ間ノ消息ヲ物語ルモノナリ。

尚本町トシテハ亀戸天神宮附近ニ於ケル三業地及所謂亀戸指定地等ノ花柳界ハ隆盛モ特記スベキコトノ一ニシテ震災後、全地域ハ実ニ驚異スベキ発展ヲ示セルモノナリ。

大島町

本町ハ東京市ニ直接境セル町トシテ隣接亀戸町ト共ニ早クヨリ発展セル地ナリ。サレバ最近ニ於ケル人口増加ノ趨勢ヲ見ルニ砂町、小松川町等ニ比スレバ決シテ高率ヲ示スモノト謂フヲ得ザルベシ。然レドモ震災直後ニ於ケル東京市人口ノ郊外流出ノ影響ト工業界ノ好況時ニヨリテ相当ノ人口増加ヲ見タルモノニシテ、既往十ヶ年ノ増加率ハ九割強ヲ示セリ。

昭和五年ノ国勢調査ニ依レバ本町ノ人口密度ハ面積一万坪ニツキ六二九人ニシテ此ノ密度ハ東京市芝区ノ密度ヲ遙カニ凌駕スルモノニシテ、本町ノ人口ハ既ニ飽和ニ近キモノト謂フベシ。

本町ノ交通機関ニツキテ言ヘバ城東電車砂町線ハ町内ヲ南北ニ貫通シ、市電ハ最近町ノ西方町界ニ沿ヒテ南北ニ通ジ、陸上ノ交通極メテ便ナリ。加フルニ葛飾乗合汽船ノ航路ハ深川高橋ニ発シ本町ヲ経テ千葉県浦安方面ニ至レルヲ以テ水路共ニ交通ノ便ニ恵マル。

憾ムラクハ本町ノ地、地盤極メテ低ク湿潤ニシテ悪水諸所ニ停滞シ大雨ノ際ハ町内ニ浸水スルコト屢々ナリシカ、対策ハ町当局及町民ノ最モ意ヲ用フル所ナリ。

斯クノ如キ地勢ニヨル本町ハ住宅地トシテハ適セザルモ、町ノ四圍ヲ繞レル河川運河ハ舟運ノ便ニ富ミ貨物ノ運送ニ便シ工業地域トシテノ好条件ヲ具備セルガ故ニ震災前後ニ於テ大小ノ工場ハ無数ニ増加シ、之ト共ニ町勢ノ発展モ亦著シキモノアリキ。然レドモ最近ニ於ケル経済界ノ不況ハ百ヲ以テ数フル工場会社ニ甚大ナル影響ヲ与ヘ、其ノ過半ハ閉鎖ノ已ムナキニ至ルノ現状ニアリ、且ツ残余ノ工場ト雖モ僅カニ事業ノ継続ヲナス程度ニシテ、之カ反響ハ必然的ニ町経済ニモ及ビ、納稅率ハ著シク低下シ町財政ハ極メテ逼迫スルノ現状ヲ招来スルニ至レリ。

砂町

本町ノ地、元來東京市ト直接境ヲ接シ、深川区方面トノ地理的關係極メテ密接ニシテ早クヨリ町勢ノ隆盛ヲ見ルベキ位置ニ在ルニ拘ラズ、亀戸町、大島町等ニ比シ町ノ発展ハ著シク遅レタル憾アリ。

之ガ原因ヲ考察スルニ、地盤極メテ卑湿ニシテ隅々悪水氾濫ノ虞アリ、加ルニ鑿井ニヨリテ適當ナル飲料水ヲ得ル能ハズ、陸上交通ノ不便等ハ従来町ノ発展ヲ阻止シタル主要ナル原因ナルベシ。

然ルニ近来ニ至リ、荒川放水路ノ開鑿、町内ノ区劃整理、江戸川上水ノ給水、城東電車ノ開通等ハ前記ノ不良条件ヲ著シク減ゼシメタルヲ以テ、最近十ヶ年間ノ発展ハ極メテ迅速ナルモノヲ見タリ。本町ガ斯クノ如ク急速ナル発展ヲ示セルハ勿論以上ノ理由ニ尽キルモノニ非ズ。即チ水運極メテ便ニシテ貨物ノ運輸ニ適シ、工業地区トシテ発展セルコトモ看過スベカラズノ原因ト謂フベシ。最近ニ於ケル越中島線ノ開通、小名木川駅ノ完成等ハ更ニ貨物ノ陸上運輸ノ便ニ加ヘ工業地区ノ発展益々囑望スルニ足ルモノアリト雖モ、現今ノ経済界ノ不況ハ工業地区ニ属スル本町ノ発展ニ一抔ノ暗影ヲ与フルモノナリ。

10 南葛飾郡町村の諸類型

以上、南葛飾郡の20カ町村の、町村の位置・地勢、土地利用、交通、物産構成、会社・工場、人口、保健衛生・上下水道、教育・文化施設などを検討してきたが、それを踏まえて町村の類型をみる事ができる。

それは、人口・その密度・増加率と工業・商業の展開度、それをもたらす東京市との位置関係、地域を劃す河川、交通運輸を基準とする。

第一の類型は、東京市に隣接し、人口が大きくて人口密度が高い。土地は農地がゼロまたはそれに近く、会社・工場の多い、工業地化している町で、亀戸町、大島町、寺島町、吾嬭町である。隅田川の左岸地域で、そこにある本所区、深川区に隣接し、あるいは隅田川を介して東京市に接する。荒川放水路によって劃され、右岸に地域である。水運に恵まれたうゑに、鉄道・軌道が発達し、乗合自動車も縦横に路線があり、交通の便は非常に良い。隅田町、砂町もこの類型である。さらに、中川によってこれらの町と劃される小松川町は、開鑿された荒川放水路の右岸となり、中川を挟んで接する亀戸町、吾嬭

町などに連動した動向をみせ、それらに準ずるものとみてよい。

これらの町は、同一の上水道町村として上水道給水地域となっている。開業医・開業歯科医も相対的に多く、社会事業施設もこの地域にはある。

急速な人口増加にともなう児童数の増加に教育施設の整備が対応できず、小学校では二部授業が多い。小松川町が旧郡制時代に郡役所所在地であったことにより、官公機関があるほか、府立女学校があるが、府立中学校が向島町にあるなどいずれもこの地域であり、数少ない私立中等学校もそうである。

町議会議員の党派系別では無産系がかなりあり、衆議院選挙で無産党得票率がかなり高い。工場労働者などの勤労階層の政治意識が反映されているであろう。

第二の類型は、これらの対極にあるもので、郡の北端、あるいは多く東端に位置し、東京市との距離のある諸村である。

人口は少なく、密度は小さく、増加率は低く、自然増である。土地は農地利用であり、農業が主要産業で、工場はないといえる。水元村であり、篠崎村、鹿本村、瑞江村、葛西村である。鉄道・軌道駅はなく、乗合自動車があるにすぎない。

この他の町村は、水元村、鹿本村を典型とする第二類型にありながら、その地理的位置、歴史的経緯、交通運輸事情などにより、いくつかの亜型となる。

その一は、もともとは向島地区の隅田町と隣接していたが、開鑿された荒川放水路によって分断された右岸地域にありながら、向島地区と

の対面にあり、荒川放水路の水運により、工場地域、そして住宅地域となった本田町である。南綾瀬町、奥戸町もそれに準ずる。

その二は、鉄道軌道の開通、駅の設置という交通要地となることにより住宅地として急速な変化を遂げる小岩町、金町である。

その三は、水戸街道の宿場として繁栄したが、近代鉄道・軌道網の形成によりその機能を失い、停滞的である新宿町である。鉄道駅が設置されながら停滞的である同じく水戸街道沿いの亀青村もここに入る。

東京市の市域拡張期に東京府南葛飾郡の20ヵ町村は、このような町村地域類型となっていた。この1932年は、戦前日本資本主義の到達点とされる1934～1936年度に極く近い年である。まさしく戦前期の到達時点の状況である。それは、その後の戦中期を経て、戦後、そして今日に至ったこの地域の地域類型的状況の歴史的な前提状況といえるのである。

註

- (1)現状調査①小松川町の他は、②松江町、③葛西村、④瑞江村、⑤鹿本村、⑥篠崎村、⑦小岩村、⑧金町、⑨水元村、⑩新宿町、⑪奥戸町、⑫吾嬬町、⑬本田町、⑭亀青村、⑮南綾瀬町、⑯隅田町、⑰寺島町、⑱亀戸町、⑲大島町、⑳砂町、である。二松學舎大学附属図書館所蔵。
- (2)拙稿「東京の東と西」『東洋学研究所通信』第7号 2001年6月。
- (3)荒川放水路 東京の下町を洪水から守るために作られた水路。1910年の洪水後計画された河川改修工事の一つ。1911年着工、1930年完成。（『世界大百科事典 1』参照）